

昭和十一年

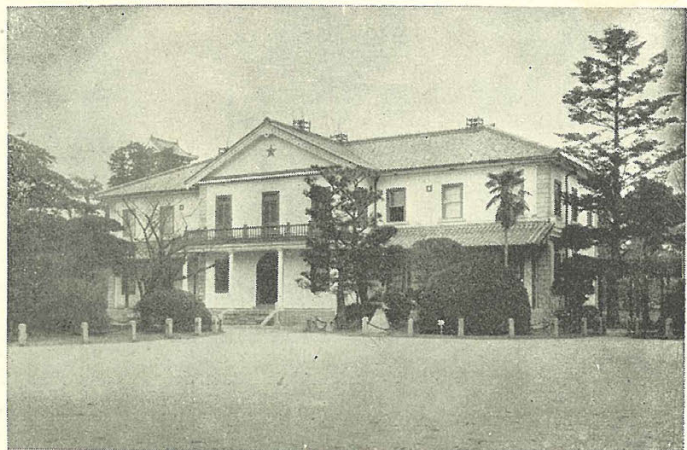
廣島市勢一斑

昭和十一年版

広島市

市勢一斑

廣島市



聖蹟大本營址

目次

| | |
|----------|----|
| 緒言 | 一 |
| 一、廣袤面積 | 三 |
| 二、氣象 | 五 |
| 三、戶口 | 八 |
| 四、市の行政組織 | 一〇 |
| 五、財政 | 一三 |
| 六、交通 | 一〇 |
| 道路 | 一〇 |
| 鐵道 | 一三 |
| 既成線 | 一三 |
| 未成線 | 一七 |
| 廣島港 | 一九 |

| | | | |
|-----|-------|-------|----|
| 通 | 信 | | 三〇 |
| 七、産 | 業 | | 三三 |
| 農 | 業 | | 三三 |
| 畜 | 産 | | 三三 |
| 水 | 産 | | 三三 |
| 工 | 業 | | 三三 |
| 内 | 國 | | 三六 |
| 外 | 國 | | 三六 |
| 金 | 融 | | 四一 |
| 會 | 社 | | 四三 |
| 及 | 組 | | 四三 |
| 合 | | | 四三 |
| 産 | 業 | | 四三 |
| 關 | 係 | | 四三 |
| 市 | 營 | | 四三 |
| 事 | 業 | | 四三 |
| 八、保 | 健 | | 四四 |
| 衛 | 生 | | 四四 |
| 衛 | 生 | | 四四 |
| 上 | 水 | | 四五 |
| 道 | | | 四五 |

| | | | |
|------|-------|-------|----|
| 下 | 水 | | 五 |
| 道 | | | 五 |
| 九、教 | 育 | | 五九 |
| 十、社 | 會 | | 六〇 |
| 事 | 業 | | 六〇 |
| 十一、都 | 市 | | 六〇 |
| 計 | 畫 | | 六〇 |
| 都 | 市 | | 六〇 |
| 計 | 畫 | | 六〇 |
| 事 | 業 | | 六〇 |
| 區 | 劃 | | 六五 |
| 整 | 理 | | 六五 |
| 道 | 路 | | 六五 |
| 事 | 業 | | 六五 |
| 公 | 園 | | 六六 |
| 三、史 | 蹟 | | 六九 |
| 名 | 勝 | | 六九 |
| 三、官 | 公 | | 六九 |
| 衛 | 其 | | 六九 |
| 他 | | | 六九 |
| 附 | 市 | | 七〇 |
| 立 | 各 | | 七〇 |
| 各 | 廠 | | 七〇 |
| 一 | 覽 | | 七〇 |

當市本町の行政は町政局長専任に任じて管理せられて居たが同年十二月町政局長に町長を置き藩廳に直屬して市全般の事務を總轄するに至つたのである。延びて同四年七月廢藩置縣となつて後は廣島縣第

廣島市勢一斑

緒言

本市は太田川の河口に當り數箇の三角洲より成つて居る。往昔五箇莊と稱へて居たが天正十七年毛利輝元此の地に城を築き城名を廣島城と名付けたので地名も亦廣島と改めたと謂ふことである。當時毛利氏は陰陽兩道八箇國を領有し廣島は其の大城邑となつたから諸將の邸宅竝商工の店舗頓に増加し市況頗る繁華を極めたのである。然るに毛利氏茲に居ること僅に十年餘、慶長五年關ヶ原戰役の後、長防二州に削封せられて萩に移り、福島正則其の後を襲ひ尾州清洲より入城したが大いに城廓を補修し爲に罪を幕府に得て元和五年信州に移され、同年八月淺野長晟安藝國一圓、備後八郡四十二萬六千石餘に封ぜられ紀州和歌山より入城し爾來淺野氏十二世の藩治は實に二百五十餘年の久しきに亙り明治維新に及んだのである。越えて明治二年六月藩籍を奉還し更に舊藩主を以て藩知事に任ぜられたのである。

當時本市の行政は市政局幹事に依つて管掌せられて居たが同年十二月市政局に市尹を置き藩廳に直屬して市全般の事務を總轄するに至つたのである。延ひて同四年七月廢藩置縣となつて後は廣島縣第



廣島鳥城天守

二

一大區となり、區長及副區長本市の行政を執行したのである。而して同十一年十一月郡區制を施行せられるや本市は廣島區と稱し區長以下吏員を置き縣廳に隸屬して區政を執行して居たが同二十二年四月一日を以て市制を實施せられ廣島市と改稱し市役所を中島新町に置き市會、市參事會及市長其の他の諸機關を具へ市政百般の事務を執行することゝなつたのである。

而して後行政區劃に大した變改はなかつたのであるが、昭和四年四月市勢の推移を洞察し隣接七箇町村の合併を行ひ逐年市政の圓滿なる發達と隆昌を圖り今や戸數約七萬八千九百戸、人口三十一萬四千人西日本第一の大都市を形成し益々明朗なる發展を遂げて居るのである。

一、廣袤面積

本市は東徑百三十二度二十五分十六秒乃至二十九分五十六秒、北緯三十四度二十分乃至二十四分二十七秒に介在し南は廣島灣より瀬戸内海に臨み其の他の方面は概ね丘陵及山岳地帯で東西十二軒二七、南北九軒六〇一其の面積六十九平方軒八八〇にして本邦都市中第八位に在る。之を明治二十二年市制實施當時の面積と比較するときは約二倍半以上の膨脹となつて居る。

今是に市域擴張の年月及區域を表示すれば次の通である。

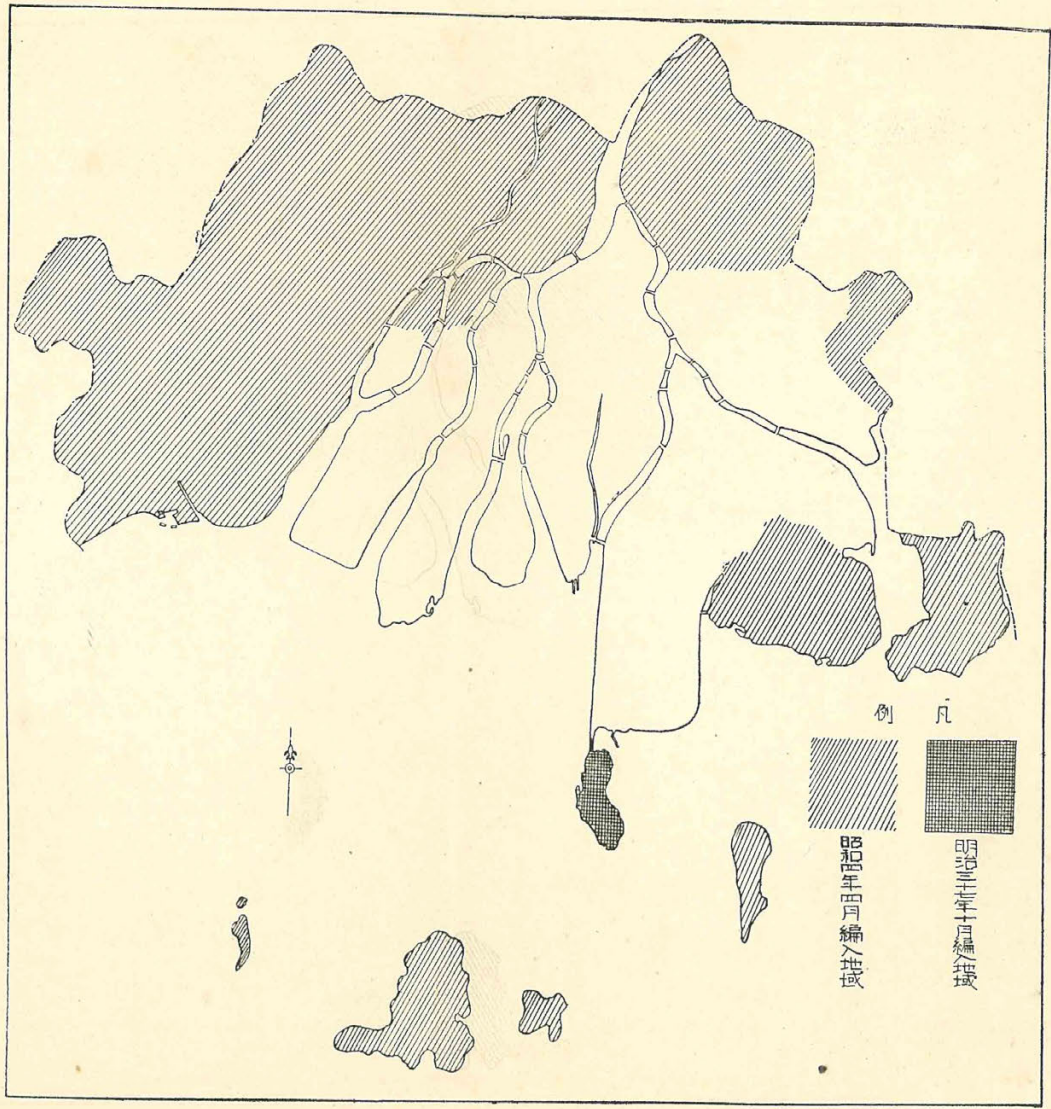
明治二十二年四月 二六、九五四平方軒 市制實施當時

同 三十七年十月 二七、三〇〇平方軒 元宇品町(安藝郡仁保島村宇品島)合併

昭和四年四月 六九、八八〇平方軒 仁保町、矢賀町、牛田町(以上安藝郡)三篠町(以上

安佐郡)己斐町、古田町、草津町(以上佐伯郡)合併

仁保、矢賀、牛田、古田各町は合併前迄は村名を稱して居たが合併後各町名に改稱した

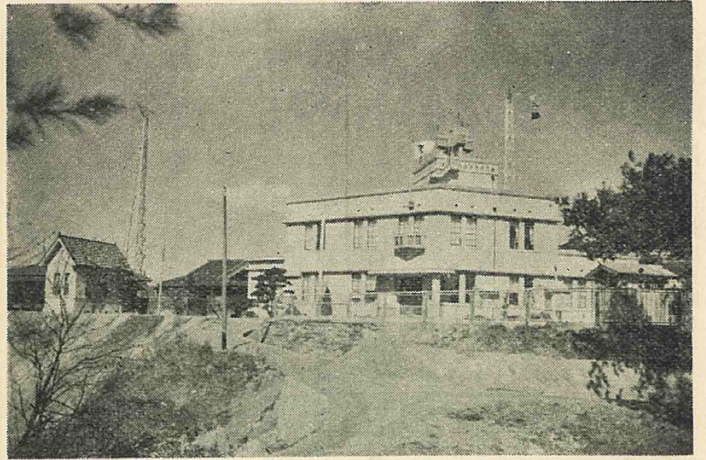


二、氣 象

本市は氣温概して中和であつて昭和九年中の平均氣温は十四度七にして平年に等しく昨年比して二分低く最高の極は八月十八日の三十五度四、最低の極は一月二十六日の零下六度九である。累年の平均氣温を観るに十四度七にして既往に於ける最高の極は大正十三年八月五日の三十八度一にして最低の極は大正六年十二月二十八日の零下八度六である。

而して降水量は千三百七耗五にして昨年よりは九耗七多く平年よりは二百二十耗寡量である。降水量の最多月は九月の三百二十八耗五にして一日の降水量の最も多い日は九月二十日の十八耗八である。降水日数は百二十二日を算へ平年の降水日数は百三十六日、降水量千五百二十八耗三である。既往に於ける一日の最多降水量は大正十五年九月十一日の三百三十九耗六となつて居る。

昭和九年度初霜は十一月二十九日であつて昨年より二十日、平年よりは十三日晚く、初雪は十二月十七日であつて昨年より五日、平年より八日晚かつたのである。終霜は昭和十年四月二日であつて昨年と同じく平年より六日早かつたのである。終雪は昭和十年三月二十一日にして昨年より八日、平年より四日晚く降雪の最深は昭和九年三月五日の一糎となつて居る。



廣島測候所

昭和九年に於ける平均湿度は七十三%にして平年に比し一%少く昨年に比し一%小である。最も乾燥したのは二月の六十七%であつて湿度最小極は二月十八日及六月六日の二十五%となつて居る。

風は一般に弱く昭和九年中平均風速度は一、四米/秒にして暴風日数は一日である。風向は夏季は南西の風多く冬季は北西の風が多い、然しながら平穩なるときは冬季の外年中日中は南西の風にして夜間は北の風となることが多い。

昭和九年中に於ける快晴は四十六日にして昨年よりは八日、平年よりは七日多くなつて居る。

昭和九年中に於ける地震の回数は二回にして昨年と同しく總て微震である。

昭和九年中の氣象の詳細は次の通である。

| 月次種別 | 氣温 | | | 湿度 | 風速 | 地震回数 | 天氣日數 | | | 降水量 |
|------|------|------|------|-----|-----|------|------|----|----|-------|
| | 平均 | 最高 | 最低 | | | | 快晴 | 曇天 | 降水 | |
| 一月 | 一・七 | 一〇・七 | 一・六 | 七・二 | 一・四 | 一 | 一 | 二 | 一 | 一五〇 |
| 二月 | 四・三 | 一四・九 | 一・三 | 六・三 | 一・五 | — | 一 | 六 | 五 | 二七〇 |
| 三月 | 七・〇 | 二〇・八 | 一・三 | 六・五 | 一・八 | — | 三 | 二 | 五 | 七六・六 |
| 四月 | 一一・一 | 二二・八 | 一〇・八 | 七・三 | 一・五 | — | 二 | 一 | 三 | 一八・三 |
| 五月 | 一八・三 | 二九・一 | 四・九 | 六・四 | 一・四 | — | 一〇 | 七 | 五 | 一八・六 |
| 六月 | 二二・四 | 三二・四 | 四・七 | 七・五 | 一・四 | — | 一 | 一 | 二 | 一八七・九 |
| 七月 | 二二・五 | 三三・一 | 四・六 | 七・七 | 一・四 | — | 五 | 三 | 二 | 一四・六 |
| 八月 | 二二・六 | 三三・四 | 四・九 | 七・四 | 一・五 | — | 四 | 九 | 九 | 二九・三 |
| 九月 | 二二・七 | 三三・三 | 四・八 | 七・五 | 一・四 | — | 一 | 一四 | 七 | 三六・五 |
| 十月 | 一五・七 | 二六・〇 | 三・五 | 七・六 | 一・五 | — | 七 | 一 | 二 | 五五・九 |
| 十一月 | 一〇・〇 | 一八・七 | 一〇・一 | 七・五 | 一・四 | — | 六 | 七 | 一〇 | 一一・五 |
| 十二月 | 七・六 | 一三・〇 | 一・〇 | 七・七 | 一・三 | — | 六 | 一〇 | 六 | 九四・三 |
| 計平均 | 一四・七 | 二四・四 | 一・九 | 七・二 | 一・四 | 二 | 六 | 一三 | 一三 | 一七〇・一 |
| 昭和八年 | 一四・九 | 二五・五 | 一・五 | 七・三 | 一・五 | 二 | 三 | 一三 | 一三 | 一七〇・八 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|----|------|------|------|------|-----|---|----|-----|-----|--------|
| 同 | 七年 | 一四・六 | 三五・七 | 一五・四 | 七四・四 | 一・五 | 一 | 四九 | 一三三 | 一三七 | 一、二五・七 |
|---|----|------|------|------|------|-----|---|----|-----|-----|--------|

三、戸口

都市生活を量の上に表示する代表的のものは人口である。人口調査に市勢上關係の深い男女別の數的關係を観るに女九十八に對して男百の割合を示し之に依り人口の本市集中の動向を想像することが出来る。之を職業別に観るに其の大半は所謂商工業人口であつて商工業を以て市是とし之に依つて大産業都市建設に躍進しつゝある本市趨勢の一斑を窺ひ知ることが出来る。

昭和九年十二月末現在に於ける本市の公簿人口及世帯數は次の通である。

戸數 七八、八七〇世帯 前年より二、五七五世帯増加
 人口 三二三、九四五人 前年より八、七八〇人増加
 内 男 一五八、一九五人
 女 一五五、七五〇人

尙市制施行以來に於ける世帯及人口の累年比較を表示すれば次の通である。(五箇年毎に示す)

| 年次 | 種別 | 戸數 | 人口 | | 摘 | 要 |
|--------|----|--------|---------|---------|---------|--------------------------------|
| | | | 男 | 女 | | |
| 明治二十二年 | | 二二、八二四 | 四一、三九〇 | 四一、九九七 | 八三、三七七 | |
| 同 二十七年 | | 二五、八六六 | 四八、四四〇 | 四三、四三一 | 八六、八七一 | |
| 同 三十二年 | | 三一、一四五 | 五五、一〇八 | 五五、五五三 | 一一〇、七六〇 | |
| 同 三十七年 | | 四〇、〇八八 | 七〇、三九六 | 六五、六六六 | 一三六、〇六二 | 戸數、人口ノ増加シタルハ元字品町(宇品島)ヲ合併シタルニ由ル |
| 同 四十二年 | | 四三、四七八 | 七三、三三九 | 六八、八五一 | 一四一、〇九〇 | |
| 大正三年 | | 四七、三九〇 | 八四、五六六 | 七八、四六九 | 一六三、〇三五 | |
| 同 八年 | | 三九、五四四 | 七七、〇三六 | 七八、九三三 | 一五五、四一八 | 戸數、人口ノ減シタルハ寄留ノ整理ヲナシタルニ由ル |
| 同 十三年 | | 四五、三九九 | 八九、三三三 | 八七、八八八 | 一七七、三〇〇 | |
| 昭和四年 | | 六六、八六〇 | 一三七、三九〇 | 一三五、九四八 | 二七三、三三八 | 戸數、人口ノ著シク増加シタルハ隣接七箇町村ヲ合併シタルニ由ル |
| 同 九年 | | 七六、八七〇 | 一六、一九五 | 一五五、七五〇 | 三三三、九四五 | |

而して之を職業別に觀れば次の通である。

| 年次 | 職業分類 | | | | | | | | | |
|------|--------|-------|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|
| | 農業 | 水産業 | 鑛業 | 工業 | 商業 | 交通業 | 公務 | 其他 | 無職業 | 計 |
| 昭和四年 | 一九、六二五 | 八、九二二 | 三九二 | 五四、二七五 | 六二、六〇一 | 一六、〇七九 | 三〇、三二七 | 三三、八二六 | 四七、五八一 | 二七三、三三八 |
| 同 五年 | 一六、三三六 | 三、六〇〇 | 五六 | 七二、八五六 | 七五、四六一 | 二〇、七四五 | 三四、八五九 | 一五、三三三 | 三八、五九九 | 二七七、〇九五 |
| 同 六年 | 一六、七七七 | 四、三三三 | 七二六 | 七七、三四八 | 八二、〇七五 | 二三、七四三 | 二八、五五五 | 一八、〇六五 | 三七、五〇三 | 二八八、九七八 |

| | | | | | | | | | | |
|-------|--------|-------|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|
| 同 七 年 | 一五、九七一 | 五、一三三 | 七七五 | 七八、一九三 | 八一、九三九 | 二四、五六六 | 二九、七七三 | 一八、八五三 | 三八、八八〇 | 二九四、一〇〇 |
| 同 八 年 | 一七、三六三 | 六、五三三 | 七五七 | 七九、五四〇 | 八三、五一五 | 二六、〇〇六 | 三一、〇九四 | 二〇、一九五 | 四〇、〇六三 | 三〇五、一六五 |
| 同 九 年 | 一五、〇〇四 | 五、五六六 | 五二二 | 六六、一三三 | 七〇、二七八 | 二三、四四七 | 二六、五九〇 | 一九、六三三 | 八七、七八三 | 三二三、九四五 |

四、市の行政組織

市勢事務の圓滑なる運行發展は延ひて都市發展に重要な關係を及すを以て常に之が圓滿なる運用を期する爲め其の組織編制は從來幾多の變更改善を加へ來つたのであるが時勢の推移と事務の實質系統等に鑑み現在に於ては市長、助役、收入役の下に十五課を置き之に二十五係を配し土木、水道關係に部を置き各事務の統一と能率の増進を圖つて居る。

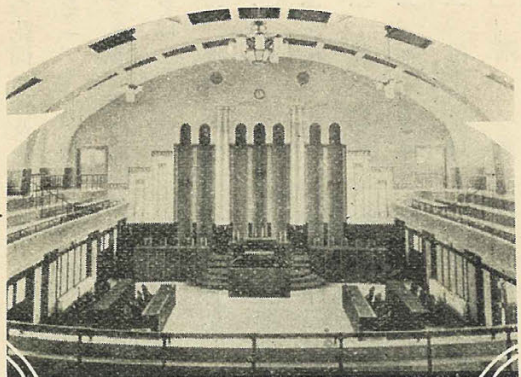
而して之に従屬する吏員及雇傭員其の他の總數は六百四十九人である。

今其の系統の概要を示せば次の通である。



市長公室

本市現在の市會議員定数は四十四人である。従来は四十人を定数として三選挙区より選出せられて居たのであるが、昭和四年四月隣接七箇町村合併に依り人口の増加に伴ひ定員四人増加し條例を改正



市 會 議 事 堂

して従来の三選挙区制を二選挙区制に改め東部選挙区より二十人、西部選挙区より二十四人を選出することゝなつたが更に昭和八年五月條例の改正を行ひ東部選挙区より二十一人、西部選挙区より二十三人を選挙することゝなつたのである。

市参事會は其の定数を十人と定められ市會議員中より選出せられて居る。

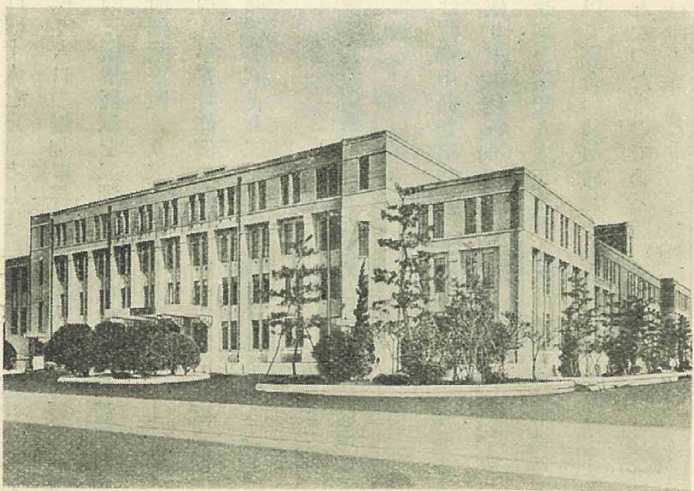
市廳舎は當初中島新町に在つたが本市地域の擴張と人口の増加に依り市事務極めて繁忙となり廳舎の狹隘を來したので之が改築の議起り大正十五年九月元廣島市立高等女學校敷地を以て廳舎の建築敷地とし移轉改築の工を起し總工

費七十五萬圓を以て鐵筋混凝土五階建現廳舎の竣功となつたものである。

而して其の建築工事の概要は次の通である。

廳舎の構造は耐震耐火的の鐵筋混凝土造にして外部は「リシン」塗仕上げとし其の腰部は本縣産の花崗石張及人造石仕上げとし屋上は議場の部分を「アーチ」形とし其の他は凡て陸屋根としたのである。屋内には煖房、給水場其の他諸般の設備を爲し其の概要は次の通である。

- 一、敷地面積 九、五九七平方メートル
- 一、起 工 大正十五年九月一日
- 一、竣 工 昭和三年三月二十八日
- 一、建築様式 近世式鐵筋「コンクリート」裝飾は和蘭式
- 一、本館建坪 二、〇三五平方メートル
- 一、延 坪 八、八八八平方メートル
- 一、階 數 地階共五階
- 一、室 數 百十一室
- 一、建物の高さ 地表より「パラベット」上端迄 十四米〇九



市 廳 舎

同 中央屋根最高迄 二〇米六〇

一、工事費總額 金七十四萬九千二百二十七圓五十三錢

一、設 備

電燈 電氣室を地階に設け配線は凡て鐵管内に通じ隠蔽工事とし其の分歧點及屈曲部には「ボックス」を設けて修理に便にし又各階適當の箇所に分電盤を設置す、照明器は多くは半透照明とし室に應じ適當なる形を用ふ。

電話 電話交換室を二階に設け共電式交換機二座席のもの二臺を据付け局電話十六箇を受け廳内私設電話百十箇を交換して居る。

五、財 政

自治の發達は必然的に都市の施設經營を多岐多端ならしめると共に一方委任行政の増嵩と物價の昂騰とは財政の急激なる膨脹を來すのである。本市に於ては昭和四年四月隣接七箇町村の合併と其の他の事情の爲に市財政は益々増加を來して居るのである。而して財政の膨脹は一面自治の發展を物語るとは謂へ其の推移は遂に都市財政の行詰りを生ずる結果に外ならざるかの惧があり従て市財政に關し

ては特に市民のより良き理解と協力とを必要とするものである。

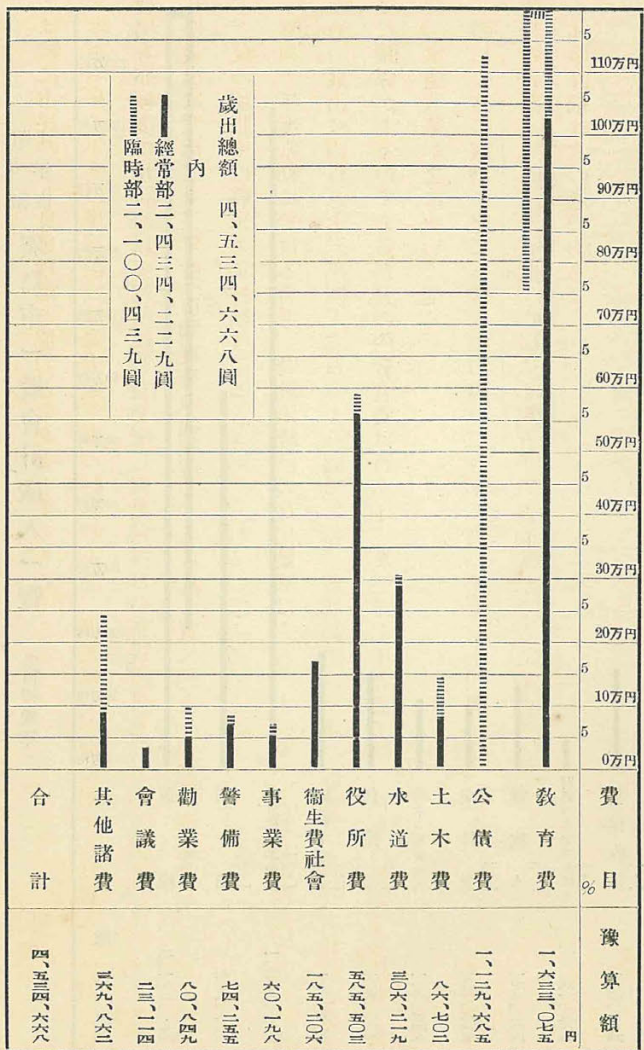
本市昭和十年度の豫算編成は過去數年來の財界の不況、事業界の不振に禍せられ歳入は低減し従て歳出も亦極度に切詰め以て適所に適費を配し尙幾何程かの新規事業を行ふべく努めたものである。尙其の歳出は明治二十三年度(市制實施の次年度)の夫に比し實に約九十倍餘の膨脹となつて居るのである。此の膨脹率は將來も尙持續すること、考へられるのである。

昭和十年度當初に於ける普通、特別兩經濟の歳出總額は六百二十四萬九千九百六十四圓で其の内普通經濟の歳出は四百五十三萬四千六百六十八圓である。普通經濟は所謂一般會計で市民の負擔と最も密接な關係があるのであるが其の内教育費は百六十三萬三千七十五圓で第一位を占め以下公債費、役所費、水道費等が之に次いで居る。

而して其の歳出に充てる歳入中市税の二百十九萬二千七百七十四圓が第一位を占め次いで使用料及手数料の百萬三千二百二十五圓、市債六十萬五千八百圓等が主なるものである。

其の詳細は次の通である。

昭和十年度 廣島市一般會計歳出一覽 (當初豫算)



市債 本市の市債未償還額(昭和九年度末現在)は七百二十八萬六千九百五圓六十八錢である。

事業別に依る市債

(昭和十年三月末現在)

| 事業別 | 未償還額 | 昭和十年度償還豫算額 |
|----------|------------------------|------------|
| 水道事業關係 | 二、一四〇、二三〇 ^円 | |
| 教育事業關係 | 一、九二七、〇六六 | |
| 土木事業關係 | 一、四八〇、七七一 | |
| 都市計畫事業關係 | 一、三四一、〇〇〇 | 四八四、四六四 |
| 社會事業關係 | 二八五、二九五 | |
| 保健衛生關係 | 六一、一四二 | |
| 勸業關係 | 五一、四〇一 | |
| 計 | 七、二八六、九〇五 | 四四一、一八二 |

市有財産 本市の市有各種財産は市勢の發展と共に年々増加しつゝあるが昭和十年三月末現在額は次の通である。

基本財産

六一〇、〇五三^円〇〇

- 罹災救助基金 四四、二六〇、二二
- 奨學資金 一四、三二八、九九
- 市立淺野圖書館資金 五〇、〇〇〇、〇〇
- 公園改良資金積立金 八、二九三、三四
- 博覽・共進會開催積立金 五、四〇〇、四四
- 公會堂改築資金 八、五五五、五〇
- 土地 一九三、一九一、一六一^坪
- 普通財産 建物(延數) (六、七二二、九六六、〇〇〇)^坪
- 其他 (五四、一八一、七八)
- 計 四、四九八、〇〇七^円〇〇
- 六、七五四、六九六^円〇〇
- 一八、七一一、五六〇^円四九

六、交通

由來本市は海陸運輸の便を得中國交通の要路に當り、國道は東より西に、縣道は北より南に貫通し鐵道は東西北の三方面を繞り、市内には電氣軌道及乗合自動車等四通八達の状態であるが其の詳細は次の通である。

道路

國道は本市の東方矢賀町より西に向つて市内繁華街の中心を貫通して草津町に至り（途中革屋町より北上して第五師團司令部に至る支線あり）其の延長一萬千八百七十五米、幅員九米乃至十二米強である。

縣道は四線あるが何れも北より南に至つて居る路線にして其の延長三萬五千三十五米、幅員十二米乃至二十二米である。

市道は市内を縦横に貫通し其の線は枚舉に遑がない迄に布設せられて居り其の延長六十七萬六千七百七十米、幅員七米乃至二十三米である。

而して以上各道路中には鋪裝したる路線があり其の延長三萬一千七百二十四米となつて居る。

而して本市中央元標より主要都市に至る國道料程は次の通である。

| | |
|------|----------|
| 豊原町 | 二六二七、五六料 |
| 札幌市 | 二〇〇七、五四料 |
| 仙臺市 | 一二八三、四五料 |
| 東京市 | 九一八、九四料 |
| 新潟市 | 九八三、八六料 |
| 横濱市 | 八九五、六七料 |
| 名古屋市 | 五四九、〇〇料 |
| 京都市 | 四〇三、七四料 |
| 大阪市 | 三五四、六八料 |
| 松江市 | 一九一、三六料 |
| 岡山市 | 一七四、〇一料 |
| 福山市 | 一〇七、六八料 |
| 尾道市 | 八七、四九料 |
| 吳市 | 二七、二七料 |

山口市
長崎市
熊本市
鹿児島市

一三九、三二籽
四三九、六七籽
三八八、〇六籽
六〇九、五九籽

鐵道

本市を通過若は起終驛とする鐵道は現在既設線六線と夫に接続して陰陽の連絡線となるべき未成線四線があり其の詳細は次の如くである。

尙鐵道當局に於ては輓近著しく増加した既設線の延長に伴ひ、監督行政上諸種の不便を除き以て運輸能率の増進を圖る爲め、本年度に於て地方鐵道局一局の新設を決定せられ之が設置地を本市とせられたのである。

即ち本市が後記諸線の集中地點であるのと、中國四國の中央大市場であり且第五師團司令部、陸軍運輸部所在地であり加ふるに吳軍港に近く、同じく交通行政監督官廳たる廣島遞信局の所在地である等經濟上、軍事上將又行政上最適地であるとの見地より本市に決定せられたものである。

之が實現の暁は交通運輸系統の統一上更に一新紀元を劃するものあるを確信するものである。

既成線

山陽本線は市の北邊を東西に走り市内に廣島、横川、己斐の三驛がある。其の一箇年（昭和九年度）の乗降車客は六百七十一萬九千六百六十四人、貨物二十六萬四千九百八十三種にして一日平均乗車客八千八百十四人、降車客九千五百九十六人となつて居る。

吳線は廣島驛より海田市驛に至り分岐して廣島、吳兩軍都を結ぶ線にして延長二十六籽四、昭和十年十一月三吳線（吳、三原間）の全通と共に縣下沿海部と本市との交通は一層至便となるのである。

宇品線は廣島驛より分岐して廣島港に至る線にして現在貨物列車の外私設の旅客用ガソリンカーを運轉してゐる。



廣島驛

The railway Station of Hiroshima. (The famous place of Hiroshima.)
廣島驛 (有名な場所)

而して昭和九年度中の乗車客は五十四萬二千六百九十八人、乗車賃二萬三千三百四十圓となつて居る。

私設鐵道藝備線は其の線名の示す如く本市と備後三次十日市、庄原方面を連絡する線にして（現在十日市、庄原間は省線編入）延長九十軒五であつて、目下建設中の三神線（備後三次、備中神代間）が完成すれば所謂陰陽連絡上の重要使命を持つ線となるものである。

而して之が昭和九年度中の乗降車客は三十五萬四千四百七十二人にして貨物量は發着共四萬四百八十廻である。

同廣濱線は電氣鐵道にして省線横川驛附近を起點として安佐郡可部町に達する線であつて延長十三軒八、縣下西北部との連絡線であり將來廣島、本郷線（廣島可部、島根縣濱田町間）が完成すれば前述三神線と共に陰陽連絡線となるものである。

而して之が一箇年間（昭和九年度）の乗車客は百二十一萬九千二百六十七人にして其の乗車賃は十四萬二千六百六十四圓である。

同宮島線は電氣鐵道にして省線已斐驛附近を起點として省線宮島驛前に達し連絡船に依り日本三景の一たる嚴島に至る線であつて延長十六軒一である。

而して之が一箇年間（昭和九年度）の乗車客は二百九十九萬四千三十一人にして乗車賃三十萬百七

十八圓を算えて居る。

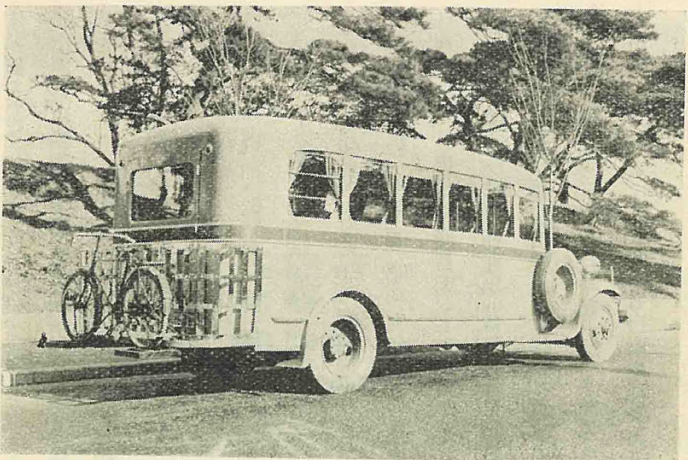
市内電車軌道は本市を東西南北に走り延長十三軒三にして其の建設經過及線名は次の通である。

| | | | | | |
|---|---|-----------------|----------------|----------------|-------|
| 本 | 線 | 〔自廣島驛前 至已斐驛〕 | 五軒一一七 | 大正元年十二月 | |
| 常 | 盤 | 線 | 〔自八丁堀 至白島〕 | 一軒一五二 | |
| 横 | 川 | 線 | 〔自左官川 至横川〕 | 一軒七七〇（單線） | |
| 西 | 塔 | 線 | 〔自紙屋町 至鷹野橋〕 | 一軒三三六 | |
| 御 | 幸 | 橋 | 線 | 〔自鷹野橋 至御幸橋〕 | 一軒〇六二 |
| 字 | 品 | 線 | 〔自御幸橋 至字品橋〕 | 二軒八二六（單線） | |

而して之が一箇年間（昭和九年度）の乗車客は二千二百七十七萬五十五人にして乗車賃百五萬七千八百八十三圓を算えて居る。

省營廣濱バスは昭和九年九月開通し廣島驛を起點とし横川町より縣道を北上して山縣郡大朝町及赤名峠を経て島根縣濱田港に至る延長百二十軒を往復して居るのである。定員三十八名の豪華自動車に沿線を睥睨しつゝ走る状態は實に堂々たるものである。

市内私營バスは廣島乗合自動車株式會社の經營にして市内の東西南北を七路線に分ち運轉して居る。



廣島濱田港間省營バス

而して之が一箇年間（昭和九年度）の乗客数は三百二十二萬四千九百四十二人、乗車賃二十二萬二千八百二十一圓となつて居る。

廣島驛を起點とする主要都市に至る鐵道料程は次の通である。

| | |
|------|---------|
| 青森驛 | 一六四六、五籽 |
| 新潟驛 | 九五三、五籽 |
| 東京驛 | 八九四、八籽 |
| 名古屋驛 | 五二八、八籽 |
| 敦賀驛 | 四九七、四籽 |
| 下關驛 | 二〇二、二籽 |
| 福岡驛 | 二八一、三籽 |
| 長崎驛 | 四四三、八籽 |
| 鹿兒島驛 | 六〇二、三籽 |

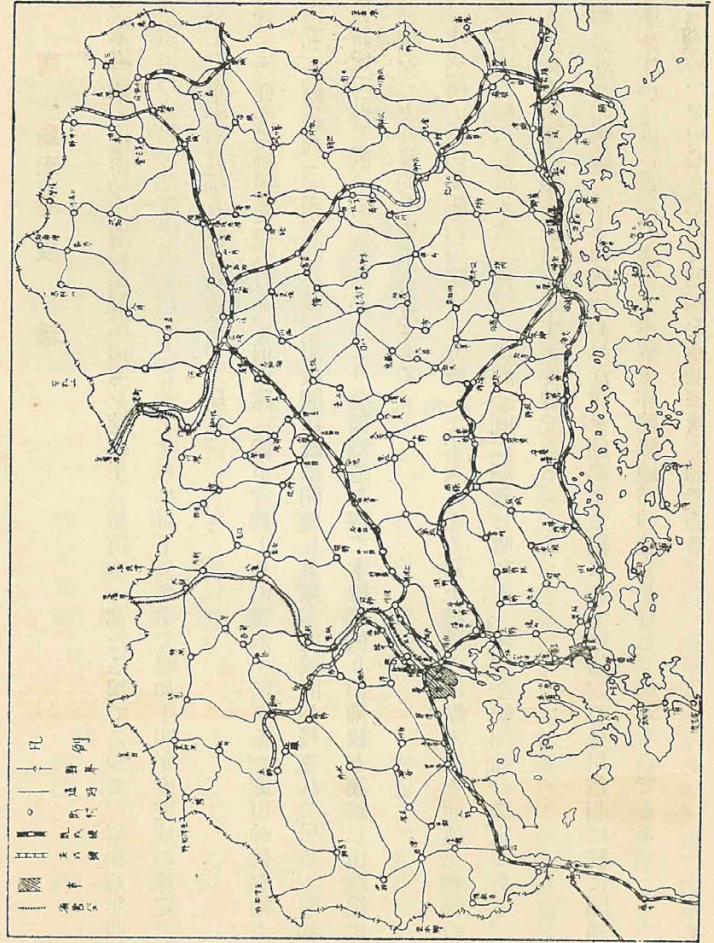
未成線

廣島、本郷線 は廣島市と島根縣濱田町を連絡する鐵道の一部たる線であつて、昭和八年四月より前述廣濱鐵道の終點可部驛附近を起點とし着工せられ目下工事中で昭和十四年度完成の豫定である、全区間六十籽本縣西北部との連絡に當つて居る。

三神線 は前述藝備鐵道三次町と、伯備線（備中倉敷より伯耆米子に至る）備中神代を結ぶ線にして十日市（三次町の内）、西城間神代、東城間は既に開通し東城、西城間が殘されて居る、昭和十二年度全通の豫定で其の曉に於ては廣島市より藝備鐵道を経て本線に依り伯備線と連絡し山陰線に結び所謂陰陽連絡の一方の目的を達する譯である。

落合、木次線 は山陰線宍道驛より分岐して木次に至る籾上鐵道の終點木次と前述三神線の中間驛落合を連絡する線にして木次、出雲三成間は既に開通し昭和十一年度全線開通の豫定である、蓋し三神線に先んじて陰陽連絡の使命を果す重要線である。

三江線 は藝備鐵道三次と山陰線石見江津を連絡する線にして江津、石見川越間は既に開通し全線開通は昭和十四年度の豫定であつて本線も亦陰陽連絡の使命を存して居るものである、而して廣島市を中心とした交通網を示せば次の通である。

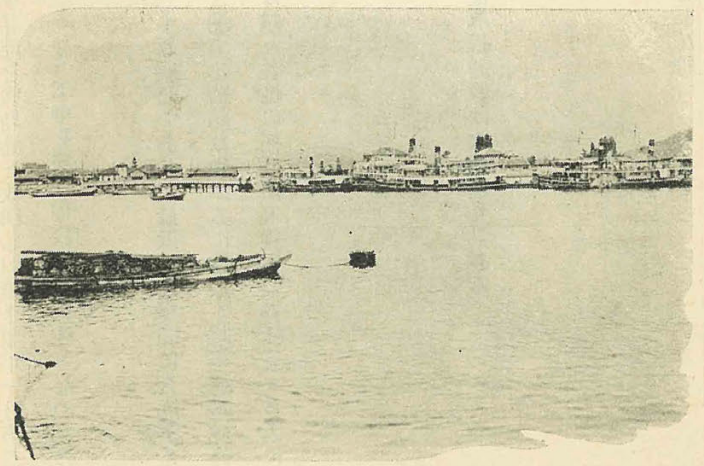


廣島港

本港は市の南東にあつて瀬戸内海の西北に位して居る。

明治二十二年十一月宇品築港が竣功し引續き明治二十七八年の日清戦役を契機として軍事上の利用を見るに至り一般貨客も増加し爲に設備も逐年面目を改め現在に至つたものである。

而して現在の廣島港は軍事上の重要港としては大いに役立つて居るのであるが、時代の進運に伴ふ商港としては尙一段の發展を爲さねばならぬ必要がある。之が修築計畫が生れ昭和五年廣島縣會に於て從來の宇品港の西方海面に工費三百五十萬圓を以てする修築豫算が可決せられ引續き之が工事計畫及起債認可申請をし、昭和七年八月臨時港灣調査會に於



(濟閣檢部輸運軍陸) 港 島 廣

て該計畫案を可とするの決定を與へられ、同年十二月宇品港を廣島港と改稱し引續き翌年一月第二種重要港灣として選定せられ同年以降内務省の直營事業として工事を施行せられることゝなつたのである。

而して廣島港に出入する定期航路汽船は内外主要線三十五航路であつて最近一箇年間に入港する汽船は三萬六千八百六十二隻であり其の他近海沿岸より入港する船舶は數ふるに遑なく將來港灣の修築成り設備の充實、各種機關の整備と相俟つて船舶航路は益々各地に拓け出入貨客の吞吐益々多大なるべきことを確信するものである。

通信

市内に於ける郵便局は四十九局を數へ其の内譯及郵便取扱通數は次の通りである。

| | |
|---------|-----------------|
| 一 等 局 | 一 局 |
| 二 等 局 | 三 局 |
| 三 等 局 | 四十五局 |
| 引受通常郵便物 | 五千三百四十一萬千七百七十五通 |

配達通常郵便物 四千百十六萬千五十七通

引受小包郵便物 六十七萬三千三百四十一箇

配達小包郵便物 四十七萬三千四十七箇

尙市内に於ける電信取扱局所は十六であり、電話取扱局所は十四である。

七、産 業

農 業

本市商工業の發展と區劃整理の進展に伴ひ耕地は漸次宅地、工場敷地、通路等に變更されて其の面積を減少せられて居るのである。

而して耕地の減少に伴ひ農作者は時代に適合した集約的農業經營の組織に變更するの氣運を醸成して居るのである。

尙昭和九年中の農産額は次の通りである。



烟 葡 萄



烟 根 蓮



(シロメ) 況實の培養室温

米 八千八百二石

二十五萬五千七百三十一圓

麥 一萬二千百十六石

十四萬五百七十三圓

蔬菜花卉 百六十三萬七千八百五十七圓

雜 穀 二十九萬八千六百八十三圓

果 實 四十五萬七百二十七圓

其 他 三十四萬九千二百三十四圓

計 二百八十七萬七千七十四圓

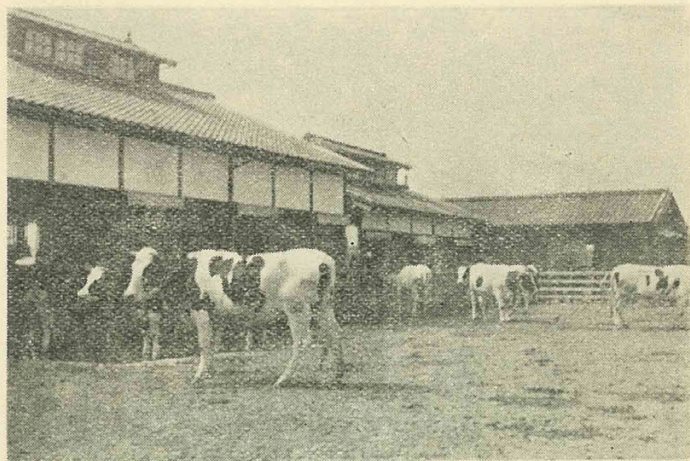
農林當局に於ては昭和十年度本市に米穀倉庫設立を決定せられ之が建設敷地も確定し、早晚人口食料問題に對する一助として米穀統制及其他的に關し寄與する所あるを確信するものである。

畜産業

本市の畜産殊に牧畜に關しては夙に之が獎勵をし
着々其の發展を促したものであるが時に其の盛衰は
あつたけれ共、現在に於ては多數の産牛兼搾乳業者
があり之が昭和九年中の成績は次の通である。

| | |
|-----|----------|
| 生産數 | |
| 牛 | 百七十七頭 |
| 豚 | 三百五十一頭 |
| 山羊 | 三十七頭 |
| 家禽 | 八萬三千八百三羽 |
| 搾乳高 | 四千三百八十九石 |

(牛乳價額十七萬五千五百六十圓)



市内牧場ノ一部

水産業

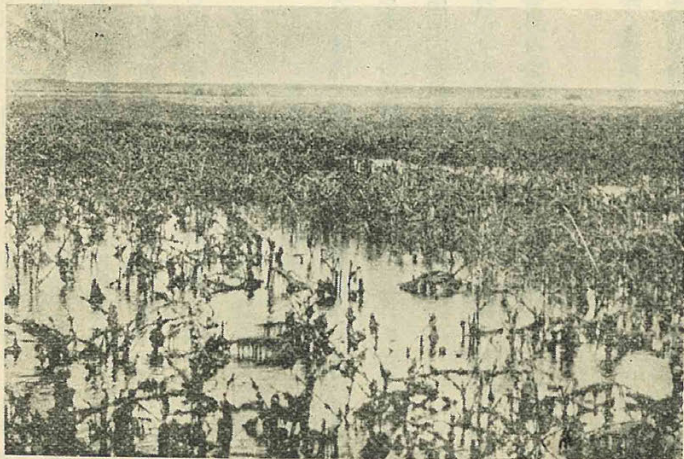
本市の近海は概ね温流であるから魚類の棲息、貝類の繁殖に適し殊に海苔、牡蠣の養殖に最好の適地である。

而して昭和九年中の水産額は次の通である。

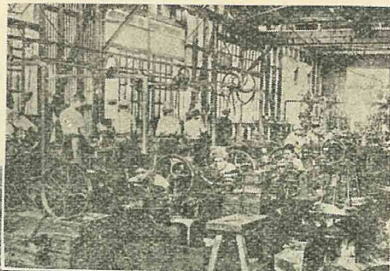
| | |
|-----|--------------|
| 漁獲物 | 五十四萬八千三百八十四圓 |
| 養殖物 | 七十八萬千七百七十圓 |

工業

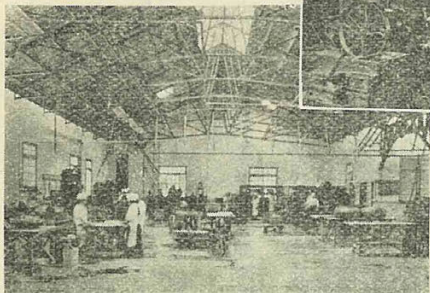
本市は産業的環境に恵まれ而して住民の工藝的能力に依り藩政時代より既に産業都市として發達し來つたのであるが眞の産業都市として發展し來つたの



牡蠣養殖場



製針工場



罐詰工場

は日清戦役以降の事である、所謂軍用港として大いに其の使命を完ふしたる廣島港は明治二十二年に完成し同二十七年山陽線の開通を見るに至り日清日露兩戦役の影響を蒙り軍事、商工兩方面に活躍したものである、而して同時に企業熱の勃興を見、罐詰、製綿、綿糸紡績、板紙、洋紙、指物及燐寸製造業等の生産工業と印刷、電気、瓦斯、鐵道、軌道及金融業の創業を見るに至り後歐洲大戰の勃發となり世界的物資需給の變調を來し本市の縫針、燐寸等盛に海外に新販路を開拓し、尙ほ同大戰以來人造絹糸、護謨製品、船底塗料、人造砥石、コルク製品、金ペン、機械工具類、兵器、自動自轉車及染織等の新興業も踵を接して起つたのである。

斯の如く新興業の勃起を見るに至れる所以のものは本市が比較的企業的諸條件に恵まれて居る事に起因す

るのであつて、即ち豊富低廉なる電力及上水道があり加ふるに質實勤勉なる労働者あり物資豊富なる爲賃銀低廉にして眞に企業の好適地であることは克く知られて居るところである。
昭和九年中の生産額は次の通である。

工 産 額 七千八百五十六千二百七十二圓
工 場 數 (職工五人以上使用) 六百七十八工場
職 工 數 二萬千五百七十八人

工産中主要品は次の通である。(單位千圓)

| 品 名 | 價 額 | 品 名 | 價 額 |
|---------|-------|-----------|-------|
| 精 米 | 六、五二五 | 蒲 鋅 類 | 八七三 |
| 印 刷 類 | 四、一八六 | 石 炭 瓦 斯 | 一、一四七 |
| 人 造 絹 糸 | 五、九六二 | 製 綿 糸 紡 績 | 一、二七四 |
| 防 腐 木 材 | 三、九〇九 | 晒 及 染 物 | 一、二七四 |
| 指 物 | 三、一四七 | 履 物 | 三、七五 |
| 針 物 | 九六三 | 清涼飲料水 | 五四〇 |
| | | 蚊 帳 地 | 四一九 |
| | | | 四一二 |

出入貨物は次第に増加し殊に這般の滿洲事變に引續き滿洲新國家の建設に依り同方面に對する輸出貿易の増進は眞に目覺ましいものがある、尙對外取引主要先は大連、大連及朝鮮を經由して滿洲國各地支那（天津、青島、上海、漢口）、佛領印度支那、米領マニラ、布哇、北米、浦鹽等である。

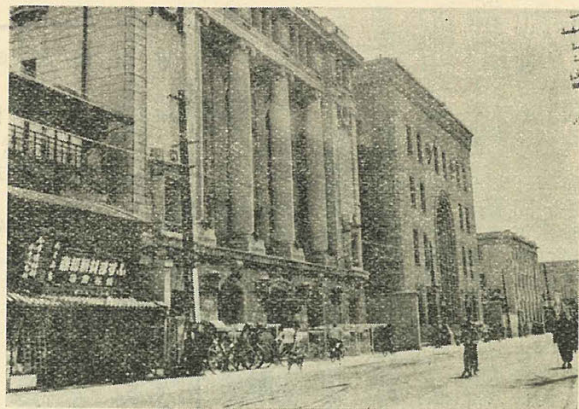
而して對外貿易は前述の如く地元港灣が不開港である爲外國に船籍を有して居る貿易船の入港を許さないのと航路關係其の他の事由に依つて阪神若は關門積替へ又は該地貿易業者の手を経るものが甚だ多いのである、其の輸出入品中主要なものは鹽乾魚、罐詰、製綿、各種織物、縫針、萬年筆、護謨製品、履物及其の附屬品、毛布、菓子類、柑橘其の他を合して輸出約四百六十萬圓及米、澱粉、牛肉皮革、石油、揮發油、機械油、肥料、生護謨、藥品、原綿、ラミー洋服地、パルプ、鍼力板、鐵材、木材、自動車及同部分品、機械類其の他を合して輸入約一千二百萬圓に達し廣島港に於ける輸出入を合して殆んど二千五百萬圓に垂んたるものがあり是等の一切は將來施工中にある大廣島港灣の修築竣成と相俟つて漸次直接輸出入の途を開かれるものと確信するものである。

輸 出 入 額

| 年 次 | 輸 出 額 | | 輸 入 額 | |
|------|-------|--------------------------|-------|----------------------------|
| | 年 次 | 金 額 | 年 次 | 金 額 |
| 昭和五年 | | 三七三、五〇七 <small>円</small> | 昭和五年 | 四、〇一八、五三八 <small>円</small> |
| 昭和六年 | | 三三二、八四七 | 昭和六年 | 三、一五一、四七二 |
| 昭和七年 | | 六〇五、八七七 | 昭和七年 | 二、七九八、七三〇 |
| 昭和八年 | | 一、六五七、〇五六 | 昭和八年 | 四、三五八、〇二一 |
| 昭和九年 | | 二、四三九、七三三 | 昭和九年 | 五、三〇五、九六七 |

金 融

金融資本の力が都市の成育に多大の寄與を爲すことは今更言を俟たない所であるが、本市の金融状態を検するに、即ち市内に本店を有する銀行は農工銀行一、普通銀行一、貯蓄銀行一、合計三行で其の他日本銀行を始め他都市に本店を有して居る夫等の支店数は十二行で昭和九年中に取扱はれたる預金高は十一億二千九十五萬三千四百四十九圓にして同年末現在高一億三千三百五十三萬七千二百七十五圓であつて、同年中に於ける貸付高は四億七千九十二萬六千四百七十六圓で年々の増加率は順調に進んで居る、尙手形交換高は二億三千六百六十四萬九百十六圓である。



住友銀行支店・藝備銀行

逓信當局に於ては本年度本市に貯金支局設置を決定せられ地方金融の一助に資せんとして居るのである。而して本市に於ける郵便貯金の總額は昭和九年度に於て預入高千五百六十萬五千二十一圓、拂戻高五百九十八萬四千八百三十四圓、年度末現在高千八百九十六萬二千二百三十圓、而して昭和九年度中新規預入人員は四萬五千六百二十四人となつて居る。

信用組合に於ける昭和九年度中の貯金高は預入三千二百六十二萬七千六百四十四圓、拂戻三千百六十萬七千五百八十圓年度末現在高千百十七萬四百十五圓であつて一組合員平均預金高は二百八十三圓となつて居る。

尙同貸付高は年度末現在高貸出六百七十五萬四千五百八十二圓である。

會社及組合

本市に於ける昭和九年末現在の會社及各種組合數は次の通である。

會社

- 株式會社 百八十七社
- 合資會社 四百十八社
- 合名會社 百十五社

以上各會社の資本金總額は一億八千九百九十八萬六千八百六十五圓である。而して之を業種別に觀るに

- 商業會社 四百七十六社
- 工業會社 百七十五社
- 交通運輸會社 二十五社
- 金融會社 十五社
- 雜會社 二十八社

以上各會社の成績は次の通である。

- 純益 千二百十八萬九千八百九十六圓
- 純損 六十九萬五百八十二圓

組合

| | |
|-------|-------|
| 産業組合 | 二十五組合 |
| 同業組合 | 十一組合 |
| 準則組合 | 八組合 |
| 任意組合 | 百二十組合 |
| 工業組合 | 十組合 |
| 商業組合 | 十組合 |
| 酒造組合 | 一組合 |
| 畜産組合 | 二組合 |
| 蠶種業組合 | 四組合 |
| 水産組合 | 二組合 |
| 漁業組合 | 十二組合 |

以上の組合員總數は三萬九千九百二十六人にして之が出資額は拂込済額六千八百四十七萬二千五百八十四圓となつて居る。

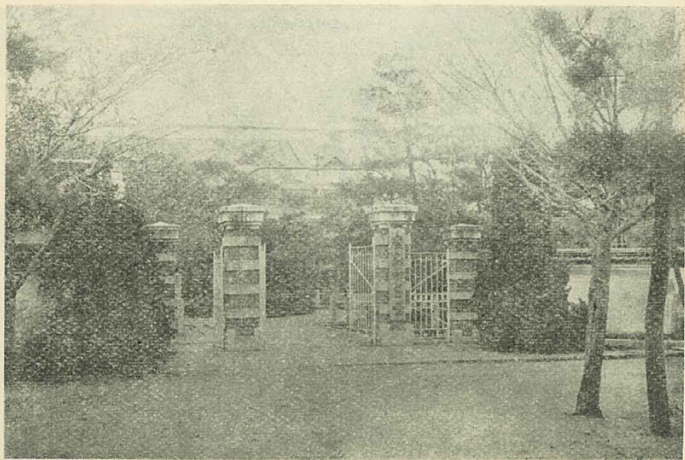
産業關係市營事業

産業關係市營事業に次の如きものがある。

屠場 は市内福島町に在つて大正三年五月經費十一萬千餘圓を以て増改築せられ今日に至つたものであるが其の建物及機械器具は嶄新にして其の設備の整備して居ることは全國有數のものであつて衛生上より見ても斷然他都市に誇るべきものがある、而して其の一箇年間（昭和九年中）に取扱はれたる屠殺數量は牛、馬、豚合して頭數一萬七千八十頭、肉量三百三萬二千二百六十七疋にして價額百八十三萬千二百六圓に達して居る。

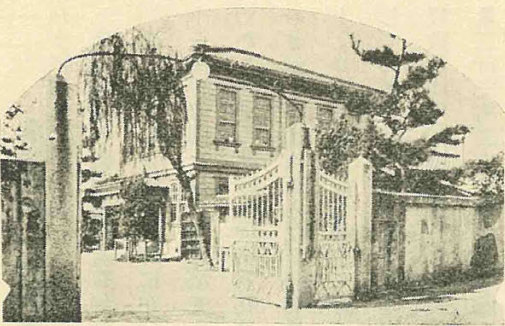
而して此の外本市所管外に宇品陸軍糧秣支廠内に一箇所の屠場がある。

常設家畜市場 は同じく市内福島町に在つて大正



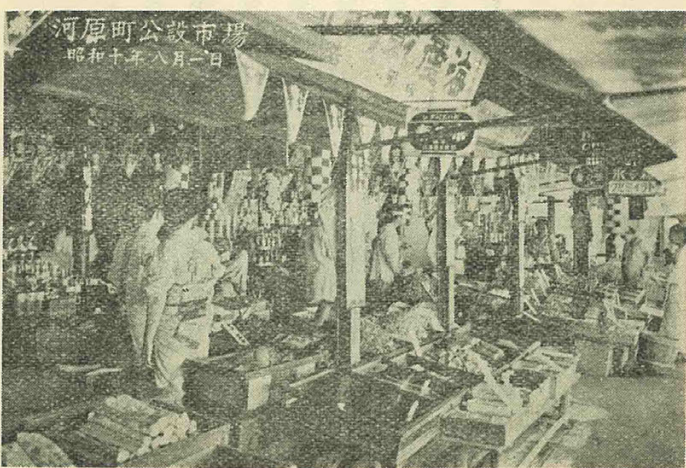
屠場

三年六月経費二萬七千餘圓を以て建築せられ、畜産地として有名なる島根縣、鳥取縣及山口縣、四國、北九州に隣接せる故を以て水陸共に交通至便なる本市に自然牛馬の集散夥しく之が一箇年間（昭和九年



常設畜産市場

中)の取扱を見るに賣買一萬五千八百八十頭其の他三千百二十九頭之が使用料金二萬三千百九十七圓となつて居る。
市場 公設
市場は各都市が保健及社會政策



公設小賣市場

の一として施設したのであるが近時是等の施設を都市計畫の一として盛に考察せられて居るのである。

本市の公設市場は卸賣市場は目下研究問題として調査中であるので市場設備としては唯小賣市場があるのみである。

公設小賣市場は大正九年物價最高騰時代に之が應急施設として三箇所開設したのに始まり其の後食料品の精選と小賣市價の統一を目的とし終に永久的施設として改善増設せられるに至り現在六箇所を開設せられて居る。

而して他面私設市場は年々増加し現在二十箇所に達して居る。
公設小賣市場の名稱及其の他の狀況は次の通である。

| 名 稱 | 所 在 地 | 開 設 年 月 | 店 舗 數 | 賣 上 高 |
|-------------|---------|---------------|-------|-------------------------|
| 東 松 原 | 大須賀町松原町 | 大正九年五月 | 一四 | 三九、〇四四 <small>円</small> |
| 大 手 町 九 丁 目 | 大手町九丁目 | 同 年 六 月 | 一二 | 四六、五六二 |
| 河 原 町 | 河 原 町 | 同 年 八 月 | 一七 | 五七、〇〇九 |
| 天 神 町 | 天神町新橋西詰 | 同 十 二 年 十 二 月 | 八 | 三八、五八五 |

| | | | | |
|-----|-------|--------|---|--------|
| 段原町 | 段原大畑町 | 昭和二年五月 | 四 | 二八、六九四 |
| 荒神町 | 荒神町 | 同年六月 | 二 | 五三一 |

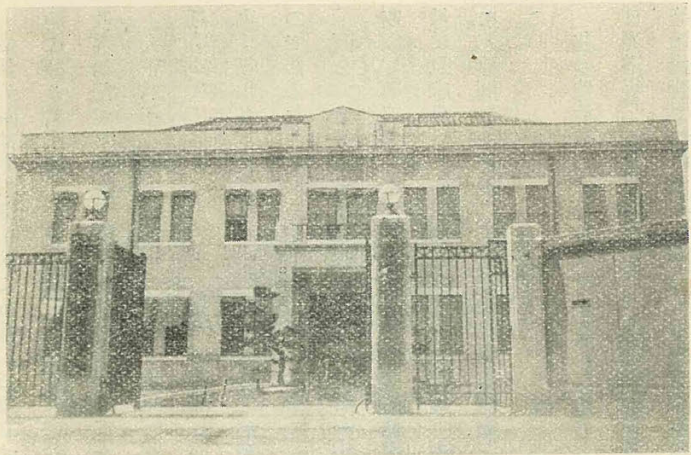
宇品市營棧橋は大正十一年七月廣島棧橋株式會社より五萬三千圓にて買收の上本市の經營となつたもので今日に至つて居るが、昭和九年中の棧橋通行人員は乗船十六萬八千二百二十六人上陸十五萬六千八十四人、入場四萬二千六十二人で之が使用料總額は一萬四千六百六十四圓である。

八、保健衛生

衛生

都市問題の中心は都市生活に於ける保健と交通の問題である、殊に新興商工業都市として合理的發展を期せんとする爲には保健政策上周到なる施設を要するのである、斯く考へ來ると本市の保健施設には今後益々改善進歩を要する點が多いのである。以下具體的施設の主なるものを掲げれば次の通である。

市立船入病院は傳染病及其の疑ある患者の收容治療を主とする病院である。



市立船入病院・衛生試驗所

大正八年建築費四十萬圓を以て起工し同十三年竣功したもので其の設備は病室七十九室あつて之を普通、特別の兩種に分ち特別室のみ有料とし他は無料として居る、而して治療、消毒及防疫機械器具に於ては近代醫療器具の粹を集め萬遺憾なきを期して居る。

昭和九年中に於ける傳染病發生數は七百八十五人にして内腸チブスは四百三十八人の多數に上つて居る。

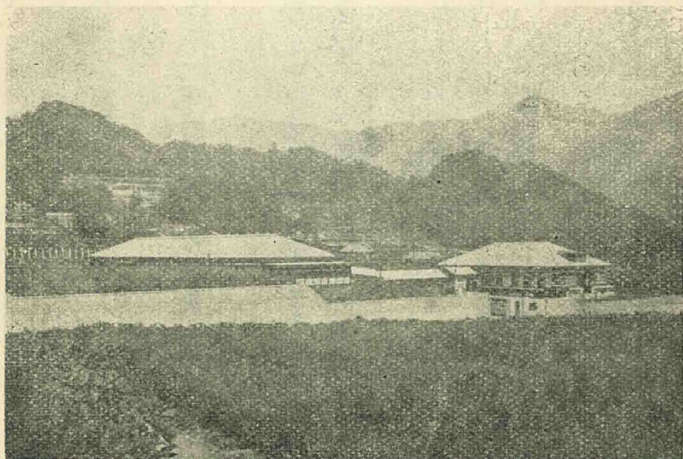
而して入院收容した者は六百八十名で全治した者は五百十六名である、由來本市は秋季より冬季に入つて腸チブス患者頻に發生したものであるが近年に至つては其のこと少く漸次市民の保健衛生思想の普及と相俟つて徹底的に之が驅除を勵行せられることと信じて居る。

畑賀病院は結核豫防法に依據して設立せられ結核病に罹り貧困其の他の事情の爲療養の途の無い者を收容治癒する病院であつて市外畑賀村に在る。

大正八年設置命令を受けて後十數年、昭和七年五月第一次工事に着手し同八年九月竣功し、第二次工事は昭和九年五月起工し同十年三月之が竣功を觀たのである。

而して之が病棟は四棟であつて、第一病棟に二十四床、第二病棟に三十床、第三病棟に八床、隔離病棟に二床合計六十床にして患者は輕症、中症、重症に三種別して總數六十人を收容する豫定となつて居る。

其の他治療にはレントゲン室(レントゲン一臺)、日光浴場(二箇所約三十坪)、消毒場(SK式消毒機)等近代醫學の粹を集め間然する所無きを期して居る。



市立畑賀病院

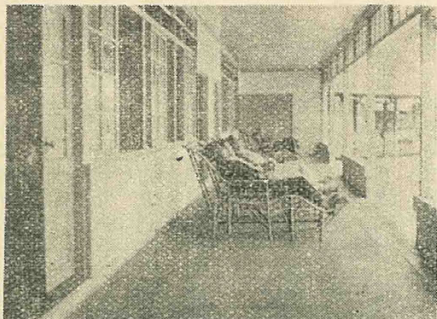
由來畑賀村は風光明媚にして閑靜、山陽本線安藝中野驛より僅に四町餘、本市より自動車にて約四十分に達する距離に在つて眞に理想的療養地である。

昭和九年中取扱に係る患者數は二十九人にして前年よりの越員を加へるときは四十三人であつて年末現在收容患者數は二十人である。

衛生試験所は大正十五年市立船入病院の一部を充當して開設し、本市上水道の水質試験及各種衛生上の試験、調査竝一般の衛生試験の依頼に應じて居る。

昭和九年中取扱に係る件數は三千四百六十件にして其の内有料試験は二千六百七十七件之が料金二千三十九圓となつて居る。

塵芥處分に就ては各都市に於ても未だ理想的方法が発見されて居ない状態であるが、本市に於ては之を請負制度に依る賣却方法を採つて居る、而して賣却せられた是等塵芥は本市より海上數里を隔てたる島嶼に肥料として搬出せられて居るのである。



市立畑賀病院日光浴場

此の方法は極めて簡易にして又理想的に近いものである、即ち市内より塵芥假溜場に掃除人夫の手に依り運搬せられ其處より船舶に依り一物も残さず搬出せられるもので、本市は此の塵芥運搬の爲に

一箇年(昭和九年中)掃除人夫延人員四萬八千八百八十五人を使用し之に衛生監視吏員二十四人を派し日々市内の清掃に努めさせて居るのである。

昭和九年中に搬出せられた塵芥量は四千三百三萬八百五十疋にして一日平均搬出量は十一萬七千八百九十疋となつて居る。

屎尿處分は各都市共多大の經費を費して最も手を焼いて居る問題である。

本市の屎尿の約九割は近郊農業者に依つて汲取られて居るのであるが近時其の需要の少い市内中央部方面に互つて、之を無料汲取方の取扱を爲して居るが其の戸數七千七百二十九戸であつて年々増加しつゝあるのである。

而して汲取處分は塵芥處分請負人の附帶義務として負擔せしめて居るのである、従つて本市に於ては此の處分の爲に市費の支辨を要しないのである、然しながら此の方法は理想的の方法ではないので其の理想的處分方法に就て現在調査研究中である。

本市の保險衛生設備は大略以上の如くであるが其の他に衛生上の連絡機關として衛生組合がある。

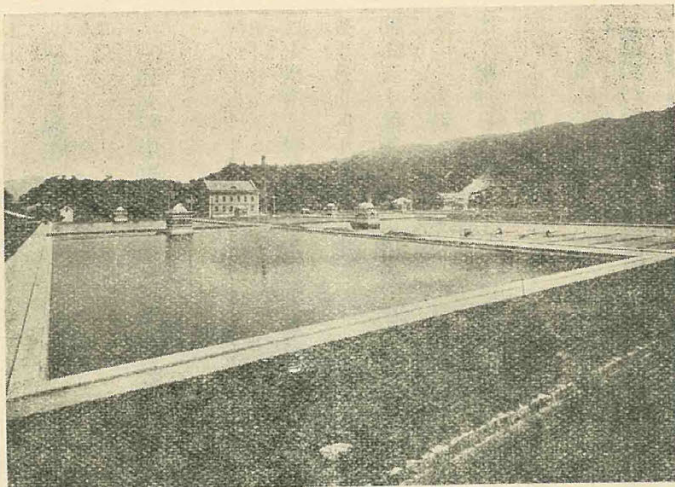
本市の衛生組合は明治三十一年縣令を以て衛生組合規則を定められ面目を一新し衛生組合としての基礎漸く鞏固となつたもので市内各町に涉つて恰く組合の設置を見るに至り現在二百十八組合、約二千五百人の衛生組長、同副組長並其の他の役員があり市民の保健衛生の爲に努力して居るのである。

尙本市には共有埋葬地と稱するもの三箇所あり其の面積六千五百八十三坪である、市の所有に係る火葬場は現在三箇所あるが何れも理想的のものでないので理想的市營火葬場に就いては現在研究中である。

昭和九年中取扱に係る埋火葬認許件數は五千四百十件となつて居る。

上水道

上水道は明治二十九年軍用水道と相俟つて起工し同三十一年一月竣工す、其の工費は軍用六十三萬九千八百四十五圓、市有二十九萬四千六十五圓を要した、而して軍用水道は同三十一年九月一日より向ふ三十箇年間本市使用の許可を得同三十二年一月より陸軍諸官衛及市内一般に給水を開始したのである、當時の施設は人口十二萬人に對するもの(一人一日最大給水量一〇六立一九)であつたが戸口逐年増加して僅々十箇年に給水限度の人口を超えるに至つたので同四十年三月第一期擴張工事を起し同四十一年三月竣工を見る、此の工費十四萬五千五百九十四圓を要し人口十六萬人に對する最大給水量一萬六千八百八十五立方メートルを供給し得るに至つたのである、然るに本市の發展著しく人口益々増加し既設の設備では漸く給水不足を告げ大正十年五月第二期擴張工事を起し同十三年六月竣工す、此の工費百八十九萬九千七百三十圓、人口二十五萬人に對する最大給水量三萬六千四百三十九立方メートル(一



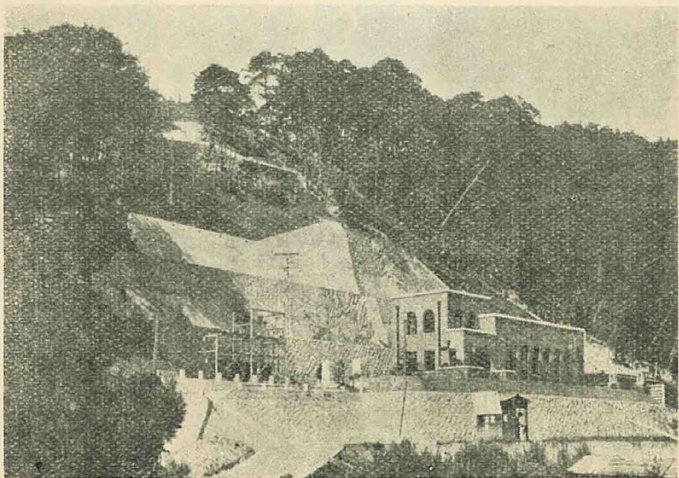
牛田浄水場

一人一日最大給水量一四八立六六)の需要を充し得るに至つたのである。爾來本市は異數の發展を爲し逐年人口増加するばかりでなく昭和四年四月隣接町村の合併等に依り急速に第三期擴張工事の必要に迫られ昭和五年八月起工、目下工事繼續施行中に屬し昭和九年度竣工の豫定である。此の工費豫算總額百九十九萬六千七百七十三圓で人口四十萬人に對する最大給水量七萬六千四百五十五立方メートル(一人一日最大給水量一九一立一四)の給水能力を有する施設である、此の工事設計中在來の設備に比し特に異なる點は從來の如く表面水を取水せず、伏流水を取入れることである、此の伏流水は表面水に比し水質著しく向上し其の儘にても飲用し得又冬季は其の水溫六、七度上昇し夏季はこれと反對の現象を示し表面水の缺點を或る程度迄緩

和し日常實用に好適するのである。

又己斐、古江、草津、三篠各町の配水に對しては己斐町新山に調整場を設け己斐橋に至れる三五〇耗配水本管を之に引入れ電動送水唧筒(三十馬力三臺)を以て海拔四五米山上の調整地(容量八七六立方メートル)に揚水し之より三五〇耗配水管二條に依り一は草津町方面に一は三篠町方面に配水する設備である。

尙取水場の鐵管布設は在來地盤以下八、九米の位置で湧水も甚しく普通接手では施工が困難なので最近發明の「ビクトリック」接手を使用したのである、此の接手は特種「ゴム」と可鍛鐵製の覆函より成り之を單に「ポールト」にて締付けるのであるから水中でも作業が容易な計りでなく水壓保持が確實で地震の場合等にも普通接手に比べて



己斐調整場

遙に安全なのである。

此の擴張工事竣工後の水源地設備の概要を示せば左の通である。

取水場 位 置 廣島縣安佐郡原村大字東原

字和久操

面 積 六、七〇〇平方米

取水 枳 最低水面下五米を基礎とし

方形鐵筋混凝土造圍内法

〇、九一米一、二二米一、五

二米の三種を長方形に併列

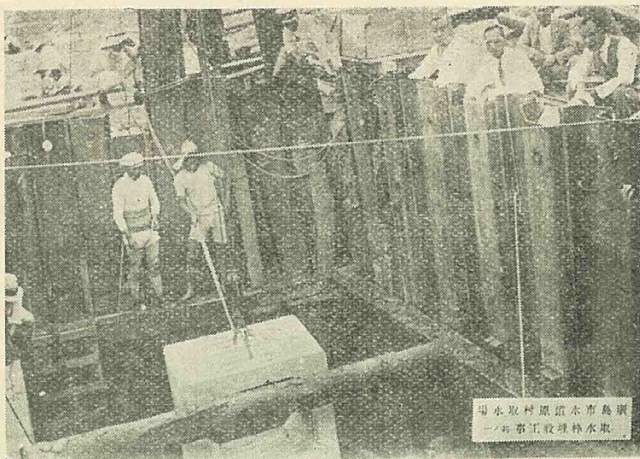
周圍に清淨なる川砂利を填

充し枳に穿ちたる多數の小

孔より浸透水を集む。

取水 管 九〇〇耗鑄鐵管二條 延長

二一〇米



廣島縣安佐郡原村大字東原
一ノ事工場取水場

部一ノ事工場取水場原

取水唧筒室 一棟 一五〇馬力電動取水唧筒四臺

送水管 九〇〇耗鑄鐵管一條 延長二、四五〇米

淨水場 位 置 廣島市牛田町字神田川成

面 積 一〇二、四二二平方米

濾過池 八箇 總濾過面積 一三、八四〇平方米

鹽素滅菌室 一棟

送水唧筒室 二棟 一六五馬力電動送水唧筒四臺
二〇〇馬力內燃機動送水唧筒三臺

配水池 七箇 貯水量 一四、六八〇立方米

量水室 二棟 六五〇耗、六〇〇耗、五〇〇耗
四五〇耗ベンデユリメーター各一臺

取水場 取水枳にて取水せる伏流水は取水唧筒に依り淨水場に送水し濾過池に依り淨化したる後送

水唧筒を以て海拔五二米の山上に在る配水池に壓送し市内に配水するのである。

尙淨水場には在來地表水取水に對する設備を其の儘豫備として存置し新設取水場事故の時使用し給

水上支障を起さぬ様にする計畫である。

而して現在の給水戸數は五萬九千八百六十九戸、配水量千六百五十九萬二千九百二十四立方米となつて居る。

本市の下水道は明治三十一年上水道と並行して之が建設を企圖せられたが財政其の他の理由に依り延期せられ同四十一年三月五箇年繼續事業として起工せられ後國庫補助等の關係に由り七箇年繼續に變更を見るに至り、大正五年五月總工費百四十六萬三千餘圓を以て竣工したのであるが、其の延長は十四萬五千五十一米、排水面積五百九十二萬七千平方米其の工事の主要は次の如きものである。

構造 は凡て土管及鐵筋混凝土管を以てせられ平均六十米に一箇の人口及燈孔を設置して居る。

下水管の内徑は最大幅員二米、水深一米七の暗渠及〇、八米乃至〇、〇二米の土管、混凝土管を流量の多寡に依て數種の口徑のものを使用して居る。

側溝 道路上及沿道家屋の雨水を直に下水道に導く爲其の兩側軒下に幅員〇、二四米深さ〇、〇九米の側溝及内徑〇、一五米の雨水引入管を築造し約三十六米毎に一箇の雨水枿を設置して本管と連絡せしめて居る。

各戸下水、汚水（一日一人平均使用水量一〇立と推定）、雨水（一時間二十五耗の降雨を標準）は暗渠式に依り公道以外は各戸の經費を以て戸毎或は數戸共同で下水管に連絡せしめて居る。公設枝管（内徑〇、一二米）の延長は四萬五千四百八十米である。

抽水場 本市の北部は高燥であるが南部新開地方面は低濕にして下水の自然流下に依る排水が不可能であるので此の方面に六箇所の抽水所を設けて汚水、雨水の疏通迅速を圖ることゝした。

而して下水道完成後の掃除方法には多大の注意を拂ひ年々修理改善及下水道の擴張を圖つて居るが現在（昭和九年末）に於ては幹支線の延長二十五萬六千九百四十一米、各戸接續管延長六万四千三百二十九米其の排水面積七百三十八萬百七平方米に及び抽水所十一箇所を數へて居る。

昭和四年四月隣接七箇町村の合併及逐年市勢の發展に伴ひ人口三十一萬餘に達したる現在に於て下水道の擴張は急務中の急務に屬する問題なので兩三年來より關係者に於て調査研究中であるから早晚具體的なものになることゝ信じて居る。

九、教 育

本市の位置、風土、民俗等環境が教育に適して居るので各種の教育機關が備り夙に教育都市としても克く知られて居る。

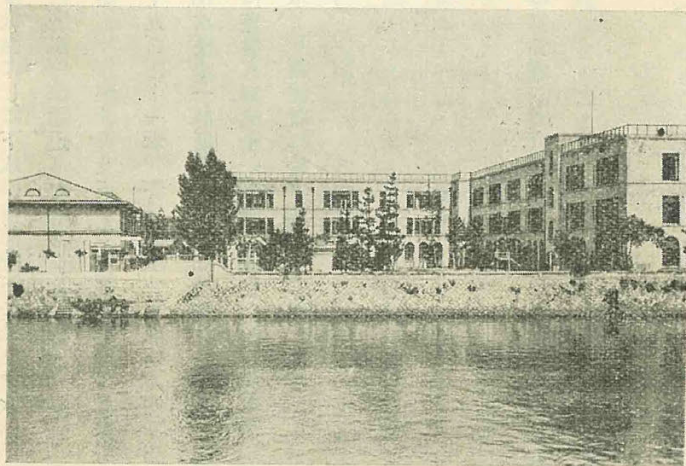
今其の概要を記述すれば次の通である。

初等教育は現在（昭和九年四月末）小學校數三十九校（官縣私立五校を含む）にして其の内尋常小學

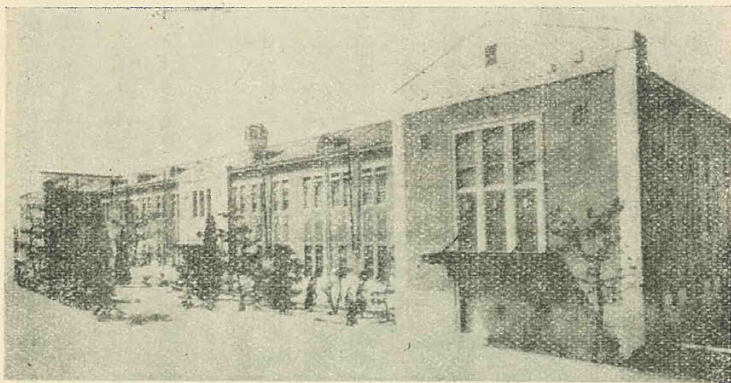
校三校、尋常高等小學校三十四校、高等小學校二校にして、之が兒童數は市立小學校の分を示すに三萬九千九百二十四人、學級數七百四十九學級、教員數八百四十一人である。

中等教育は現在中學校八校、高等女學校八校にして、其の内官立一校、縣立二校、私立五校、高等女學校は縣立一校、市立一校、私立六校にして生徒數は中學校五千二百一十一人、教員數二百七人、高等女學校生徒數五千二百七人、教員數二百二十人となつて居る。

實業教育は現在市立實業補習學校二校及市立商業學校一校、縣立一校、私立三校合計五校が在り其の生徒數三千二百三人、教員數百二十人となつて居る、工業學校は縣立のもの一校であつて其の生徒數八百四十一人、教員數五十二人である。



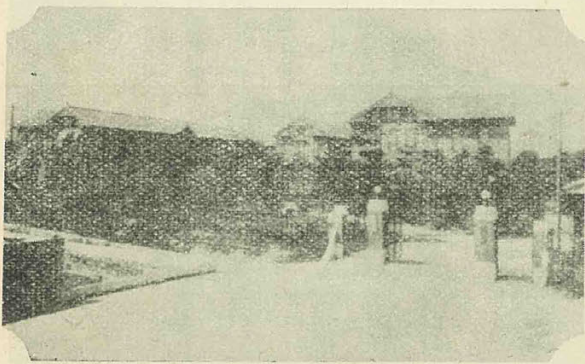
市立小學校



市立高等女學校

師範教育は縣立師範學校一校にして其の生徒數三百二十一人、教員數二十四人となつて居る。

高等教育は文理
科大學一、高等學
校一校、高等工業
學校一校、高等師
範學校一校にして
何れも官立であ
る、其の學生、生
徒數は千九百六十
八人、教授數二百
六十二人、其の他
に縣立女子專門學
校、私立女子專門
學校各一校があり



廣島高等工業學校

其の生徒數四百三十六人、教授數四十八人となつて居る。

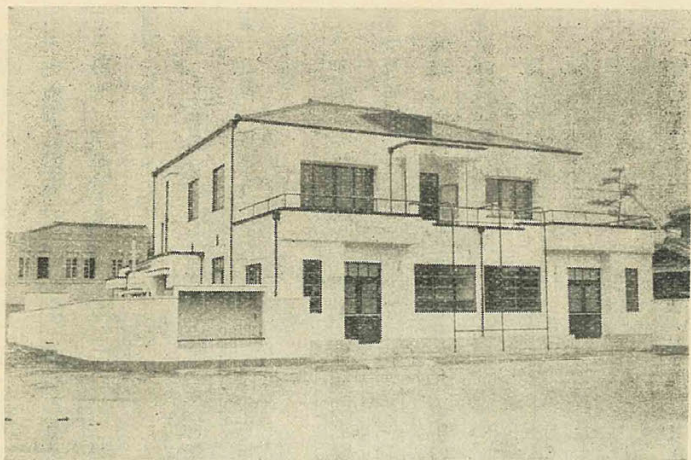
特殊教育としては縣立盲學校及聾學校各一校があり其の生徒數二百四十四人、教員數二十人となつて居る。

其の他に各種學校四十二校がある。

社會教育を施す機關としては市立淺野圖書館及其の他に同じく市立圖書館七館と文理科大學附屬圖書館がある。

市立淺野圖書館は舊廣島藩主淺野家の創立に係り經營せられて居たものであるが、昭和六年本市に全部を寄附せられ同年十月より市立圖書館として開館するに至つたものである。

而して其の藏書數は五萬五千八百五十一冊にして之が一箇年間の閱覽人員五萬千九百十六人となつて



市立中央職業介紹所

居る。

尙青年學校は三十五校、男女青年團各三十二團等があつて各社會公民教育の爲其の使命に邁進して居るのである。

十、社會事業

社會事業は所謂社會的に不幸なる人に對する保護救済及福利増進を目的とする事業であるが、本市に社會課が設置せられたのは僅に十餘年前の事であり従つて本市の社會事業施設には尙幾多改善を要し進歩を圖らねばならぬ點が多いので現在着々其の機能を發揮すべく努めて居るのである。

尙本市所管の社會事業施設を列記すれば次の通である。



廣島文理科學大學

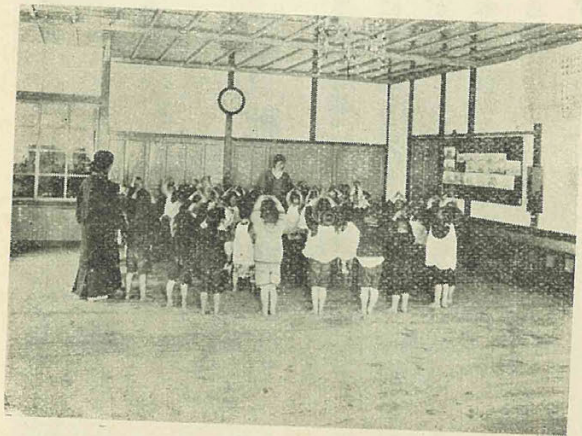
職業紹介所は従來市の東西に各一箇所づゝ在つて其の全能を擧げて居たのであるが更に昭和八年市の中央地點に從來の二箇所を一箇所を集め而して之が新築を計畫し同九年十月工費三萬二千餘圓を以て千田町三丁目電車軌道に面して白堊二階建のものを建築したのである。

而して昭和九年中の取扱数は求人一萬六千七十六人、求職一萬九百三十人、就職四千六百二人となつて居る。

託兒所は少額所得者の幼兒（三歳以上學齡期迄）を晝間保育するを以て目的として居る。

本市の經營する託兒所及昭和九年度中の託兒延人員は次の通である。

- 東隣保館託兒部 二萬四千四十六人
- 西隣保館託兒部 四萬二千四百五十八人
- 草津託兒所 三萬三千百七十五人
- 仁保託兒所 二萬二千八百十九人



市立託兒所

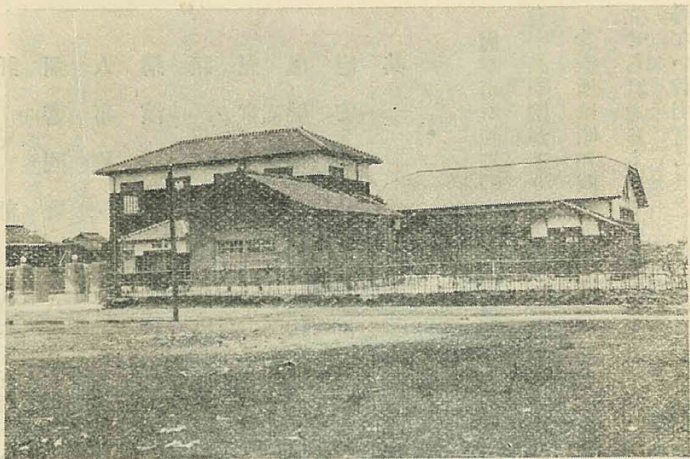
- 楠那託兒所 一萬五千四百七十七人
- 廣瀨託兒所 一萬四千八百六十八人
- 江波託兒所 一萬三千三百七十人
- 三篠託兒所 一萬五千六百十五人
- 荒神託兒所 現在開設準備中

尙本市所管外に公私設託兒所が六箇所ある。

隣保館は大正十三年二月社會教化と融和事業施設の必要を認め市内東西に各一箇所（尾長町及福島町）に建設せられたものである。

而して其の事業の主なるものは託兒、簡易圖書閱覽、人事相談、講演及講習等にして保健衛生上よりは住居宅の改良にも意を注ぎ善隣教化の實を擧げつつあるのである。

従つて之が利用人員も年々増加の傾向があり昭和九年度中の總延人員は次の通である。

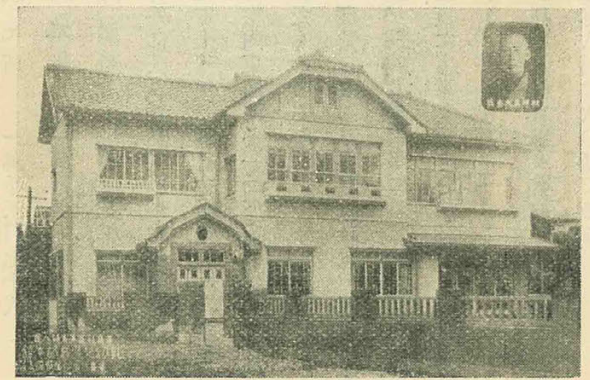


宇品學園

| | |
|---------|------------|
| 託 兒 部 | 六萬六千五百四人 |
| 圖 書 閱 覽 | 千八百五十八人 |
| 人 事 相 談 | 七百七十九人 |
| 講 演 講 習 | 五千百六十六人 |
| 諸 集 會 | 二千百七十六人 |
| 兒 童 指 導 | 七千二百二十人 |
| 保 健 衛 生 | 三萬四千七百四十八人 |
| 慰 安 娛 樂 | 五千百二十三人 |
| 其 他 | 一萬二千五百十八人 |
| 合 計 | 十三萬六千六十人 |

尙本市所管外の隣保事業施設として宇品町に財団法人喜清會宇品學園があり同方面の善隣教化に盡して居る。

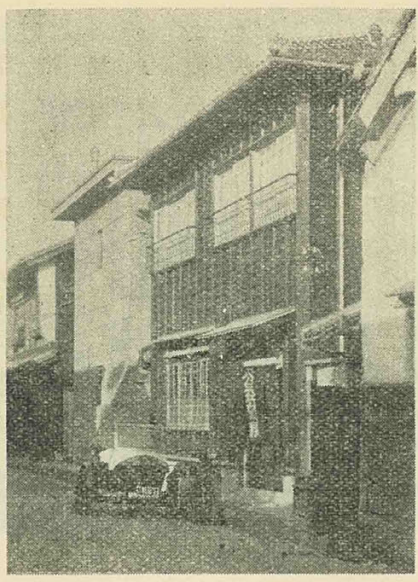
診療所は昭和四年九月少額所得者の醫療救護施設として設立せられたるもので東西に各一箇所ある。實費診療を本則として居るけれ共其の醫療費の納付を爲し得ない貧困者には之を無料として居る、診療科目は内科、外科其の他一般醫療診斷で調劑は之を行は



廣島社會事業婦人會乳幼兒保育部

す處方箋のみ交付して居る。

昭和九年中に於ける診療延人員は二萬九千七百四十六人である。



市立公益質屋

公益質屋も亦少額所得者に對する安全且簡易なる金融機關で昭和五年十二月東西に各一箇所設立せられ、



廣島修道院



院老養島廣

六八

執務時間は午前八時より午後九時迄とし貸付金額は一口に付十圓以上、一世帯五十圓を限度とし利率は一箇月百分の一・二五、流質期間を六箇月とし特別の事由ありと認められるものは之を延長することゝして居る。

昭和九年中に於ける貸付金額は七萬三千四百三十八圓で辨済金額六萬四千九百八圓、流質金額七百二十三圓となつて居る。

市營住宅は歐洲大戰後人口の都市集中化と住宅難との結果住宅補給と都市衛生の維持改善及最近に至つては家賃の低廉化の爲に大正十一年六月より同十五年七月迄に低利資金十八萬圓を借入れ八十六戸を建築し其の目的の一部を達成したのであるが昭和五年四月時代の趨勢に鑑み一律に約二割方の家賃値下を行

ひ益々所期の目的に向つて進んで居る。

而して之と並行して住宅補給解決の一助として住宅組合の設立を指導獎勵し現在にては三十組合、二百九十八人の組合員がある。

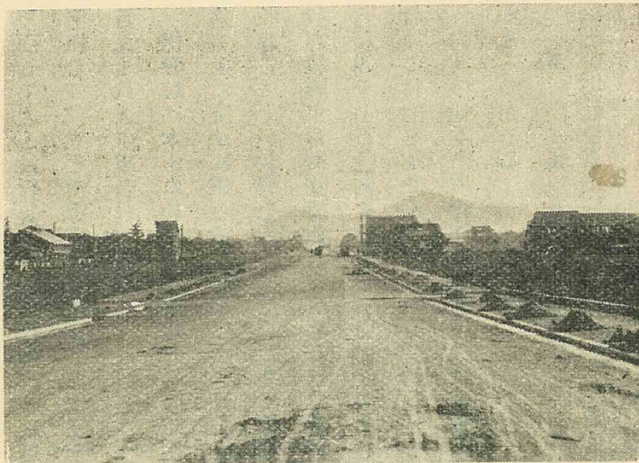
保養院は本市に於ける行旅病人及同死亡人、精神病者及救護法に依る救護收容は従來私設機關に委託收容して之が救済をして居たものを直接本市に於て收容救護する機關であつて、昭和八年度に於て豫算八萬四千七百餘圓を計上して之が建設を計畫し施療救護の目的を達せんとして居る。

尙其の他本市所管外の公私設社會事業團體に次の如きものがある。

- 廣島養老院 (養老事業)
- 廣島社會事業婦人會 (乳幼児保育事業)
- 乳幼児保育部
- 廣島修道院 (育兒事業)



所泊宿料無島廣



(濟閩檢部輸運軍陸) 部一の線品字場的るせ功竣

- 廣島育兒院 (育兒事業)
- 宇品學園 (隣保事業)
- 福島町一致協會 (授產事業)
- 尾長町協和會 (授產事業)
- 廣島無料宿泊所 (宿泊救護事業)
- 樂石社廣島支部 (異常兒保護事業)
- 廣島保護院 (免囚保護事業)
- 縣立廣島學園 (感化事業)

七〇

十一、都市計畫

都市計畫事業

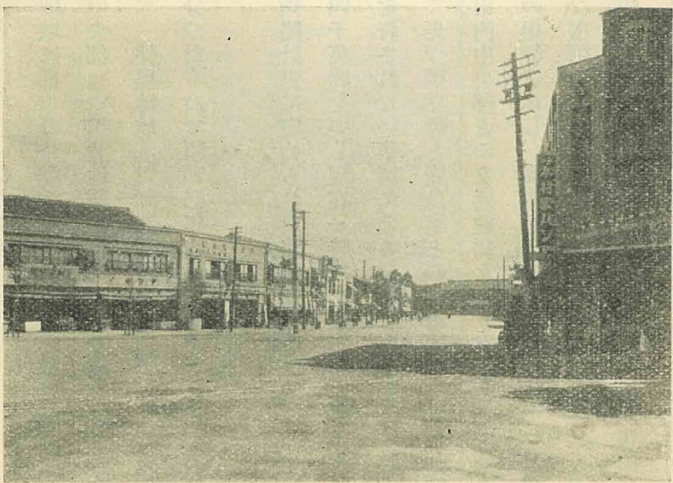
産業の發達に伴ふ人口の都市集中は近代都市共通の現象である。

都市計畫は都市の完全なる發達及合理的向上を期する上に於て最も重大なる現在に於ける各都市共通の都市問題の中心を成して居るのである。

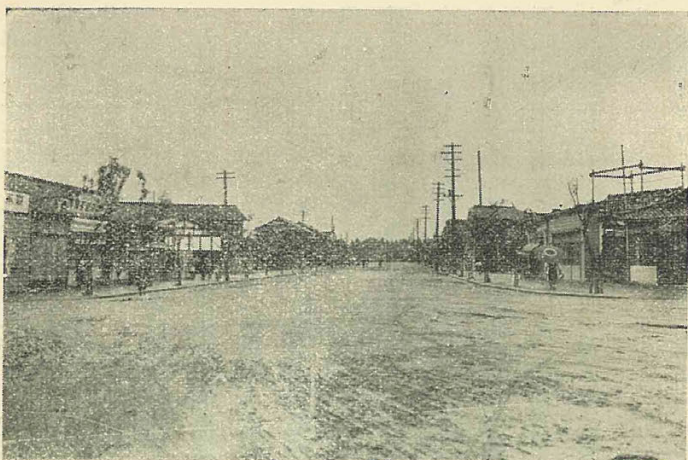
本市は大正十二年七月都市計畫法の施行と共に一大都市計畫を企圖し漸次之が具體的進展を計つて居るのである、従つて之が實現の上は交通、保安、衛生、經濟上に及ぼす市民の福利増進は實に偉大なるものがあると信するのである、以下其の區域、地區、地域、街路等に付大要を記述すれば次の如きものである。

區域は本市の全地域にして廣袤東西一萬二千二百二十七米、南北九千六百一十米、面積六千九百八十八萬四千二百四十四平方米(四方里五分三厘)である。

地區は本市に於ては市街地建築物法に據る地區



む望を通町田千りよ近附橋野鷹



路道新町音觀るせ功竣

の指定は現在ないのである。

地域は都市の分業的組織に依り商業地域（概ね市内中央部）、工業地域（市内東部及南部北部の各一部）、住居地域（概ね前記商業工業地域を除いた部分）に分つたもので昭和二年六月指定せられたものである。

街路計畫に定められた路線は二十九線にして工費約四千萬圓を要し現在一時に之が工事に着手することを許されない事情にあるを以て財政の許す範圍に於て先づ廣島驛と廣島港との船車連絡、近郊新開地と市内中央部との交通連絡を圖り且近郊新開地に街路の根幹を示し、區劃整理の施行と相俟つて亂雑不整な市街化を未然に防止する等緊急缺く可からざる路線十三線を選び此の工費八百十六萬圓（後追加せられて千三百萬九千餘圓となつた）にして昭和四年

度より同十三年度迄の十箇年（後事業年度一箇年延長せられて昭和十四年度迄となつた）繼續事業として計畫し昭和五年認可を得たものである。
事業施行決定の街路は次の通である。

都市計畫事業街路

| 街路名 | 幅員 | 區間 |
|----------------------------|---------------|---|
| イ、一等大路第三類 第二號線（十日市荒神町線） | 二 （一部二十五米） | 西九軒町ヨリ鍛冶屋町ニ至ル 及的場町ヨリ荒神町入口ニ至ル（新架橋ヲ除ク） |
| 第三號線（荒神町矢賀線） | 二 （一部三十米） | 前號路線終點ヨリ荒神町蟹屋町界ニ至ル區間 |
| 第四號線（十日市已斐線） | 二 二十米 | 西九軒町（第二號線ノ起點）ヨリ已斐町ニ至ル區間 |
| 第五號線（十日市横川線） | 二 二十米 | 西九軒町（第二號線ノ起點）ヨリ横川町三丁目ニ至ル區間 |
| 第六號線（小網町江波線） | 二 二十米 | 小網町第四號線ヨリ分岐シ船入町ヲ經テ江波町長通ニ至ル區間 |
| 第七號線（的場宇品線） | 二 （一部二十米） | 的場町第二號線ヨリ分岐シ段原大畑町ニ至リ右折シ皆實町ヲ經テ宇品町市營棧橋ニ至ル區間 |

| | | |
|----------------------------|--------------------------------|--|
| 第八號線(船入皆實線) | 二 (一部二十二米) | 大手町八丁目ヨリ南竹屋町及京橋川新架橋ヲ經テ皆實町ニ至リ的場宇品線ニ接續スル區間 |
| 第九號線(船入御幸橋線) | 二 十 二 米 | 皆實町(御幸橋東詰)ヨリ的場宇品線ニ接續スル(專賣局東南側)區間 |
| 第十二號線(廣島驛前線) | 二 十 二 米 (驛前ニ廣場ヲ設ク) | 大須賀町ヨリ第二號線終點ニ至ル區間 |
| 第十三號線(船入梅屋線) | 二 十 二 米 | 觀音町九五二番地ノ一ヨリ同町南七〇四ニ至ル區間 |
| 第十四號線(觀音十日市線) | 二 十 二 米 (一部十五米) | 西觀音町二丁目五間道路ヨリ船入梅屋線ヨリ分岐シ天溝町ニ至ル區間 |
| 第十五號線(觀音町線) | 二 十 二 米 | 觀音町ニ於テ船入梅屋線ヨリ分岐シ二等大路第一類第二號線ニ接續スル區間 |
| ロ、二等大路第一類 第二號線(皆實、東新開線) | 二 十 二 米 (一部二十六米) | 船入皆實線終點ヨリ皆實町三ノ割ニ至ル區間 |

而して

事業路線延長

一萬九千六百四十四米七

現在竣功路線延長

七千八百一十一米六

となつて居る

區劃整理

道路の幹線は都市計畫に依り決定せられて居るのであるが、其の支線等に至つては未だ具體的のものなく従つて是等に關しては土地區劃整理組合の設立に依り解決を圖るべく郊外地方面に對し該組合の設立を奨勵し現在組合數五組合がある。

而して現在區劃整理に依り造成せられたる道路數は十一萬九千九百八十八平方米餘にして、將來區劃整理組合の手に依つて造成せられんとする道路數は十三萬三千八百八十五平方米餘であつて、區劃整理組合が自ら計畫造成した路線を本市に無償提供すれば其の面積二十四萬四千二百八十三平方米餘となり従つて郊外路線の大部分は市費を要することなく數年間に實現することゝなるのである。

道路事業

本市現在に於ける主要なる道路は都市計畫に依り企圖せられて居り其の他の道路事業は都市計畫街路に對する補助道路事業として道路擴張及鋪裝工事事業がある。其の何れも失業應急事業として施行せられて居るのである。

而して昭和九年度末現在に於ける失業應急事業の
 擴築及鋪裝工事に依る道路の延長及幅員は次の如き
 ものである。

| | | |
|------|----|-------------|
| 擴築工事 | 延長 | 一五、四四四米三 |
| | 幅員 | (平均) 七米三 |
| 鋪裝工事 | 延長 | 五四、一九一米〇 |
| | 幅員 | 二・二米乃至一・二米二 |

公園

本市には次の如き公園がある。

比治山公園は純然たる山林公園で其の山容が恰も
 虎の臥して居る如き形をして居るので臥虎山の別稱
 がある、其の面積十六萬四千餘平方米にして南北に
 蜿蜒し、満山老樹蒼鬱として其の風景最も閑雅であ

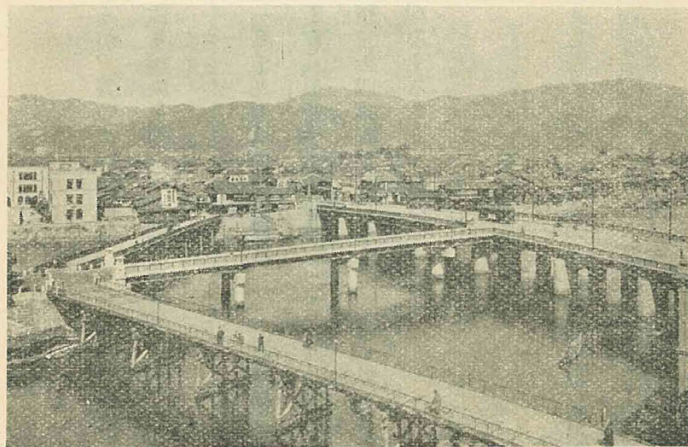


比治山公園の一部

る、山嶺は眺望浩濶にして市街を雙眸に收
 めることが出来る。

南方遙に廣島灣を望み近く宇品、江波の
 風物を指摘することが出来る、山の北端は
 之を開いて平地とし垣々數千項、其の一部
 に舊御便殿及大正天皇御即位大典記念館を
 建設し又山北西に櫻花を植ゑ陽春開花の
 候には花を賞し銷夏林間の涼風に一日の汗
 を忘れ、紅葉秋月を詠むの候には杖を此の
 地に曳く者跡を絶たず、満山銀を敷き連樹
 雪に惱むの風情に至つては蓋し他に其の比
 を見ない所である。

昭和三年攝政宮殿下行啓記念事業として
 公園路改築の工を起し(園内舊御便殿注連

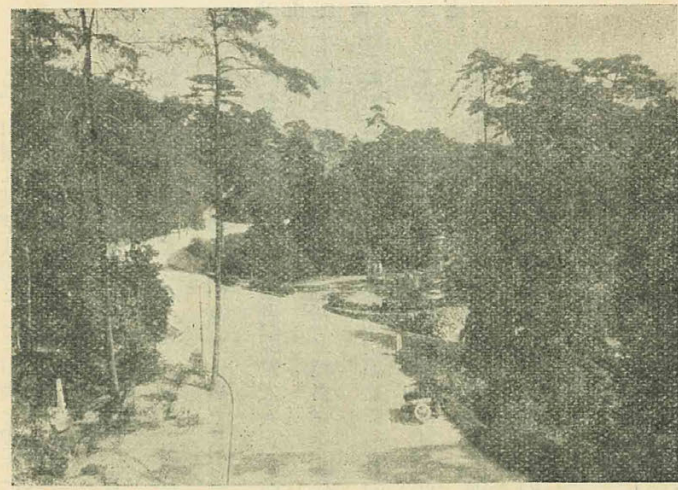


相生橋丁宇橋

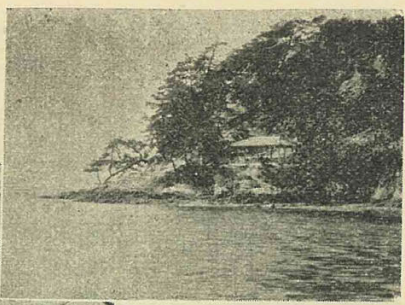
繩柱前より蜿蜒多聞院下に至る道路) 同年竣功したものである、其の他に陸橋及兒童遊園地及市内義俠家の手に依つて成された廣場等林間公園としての設備を漸次整へるに至つたのである。

尙同公園内には陸軍墓地及頼家諸先生の墓所、頼山陽文徳殿、故早速大藏大臣銅像があり近く故加藤元帥銅像も建設せられんとして居る。

江波公園は市内江波町に在り其の面積三萬四百餘平方米であつて全山古松鬱茂し、殊に三方を海に繞らし山嶺の眺望最も爽快を極め東は廣島港及比治山を展望し、西南は風光明媚なる廣島灣に臨んで安藝の小富士、繪の島、辨天島、嚴島等烟波の間に縹渺し近く白鷗の波に戯れるの風情に至つては到底筆舌には現し難いものがあるのである。



比治山公園の一部



江波公園



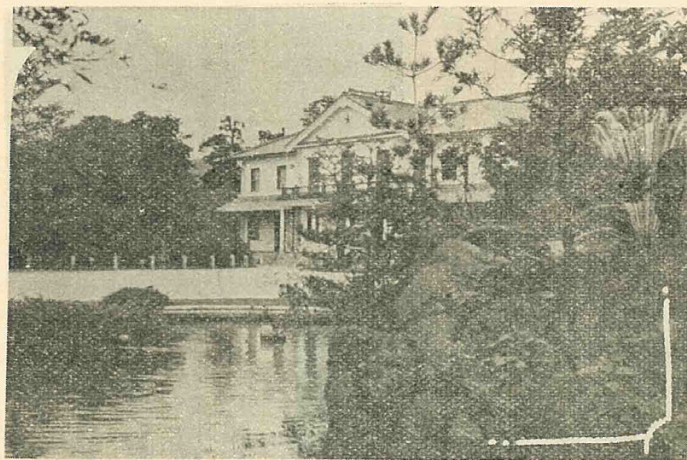
大芝公園

大芝公園は市内三篠本町の東端太田川の清流に沿ふ堤防敷町の間に在つて其の面積三萬三千七百平方メートルにして櫻花の候を以て克く知られて居る。

十二、史蹟名勝

大本營址 日清戦役の際、明治二十七年九月十五日長くも大森を此の地に進めさせ給ひし時行在所に充てさせ給ひ翌年四月二十七日迄萬機を統べさせ給ひし聖蹟にして舊廣島城本丸址即ち第五師團司令部であつた建物を其の儘に御利用あらせられ其の調度の御質素なることは拜觀者をして襟を正さしめ感激に咽ばしむるものがある。

現在廣島縣の管理に屬し監視警護を嚴重にして一般



大 本 營 址

人に拜觀を許して居る里程は廣島驛より約二千五百米である。
廣島城址
 鯉城、在間城、當磨城、石黒城等の別稱があり
 天正文祿の際山陽、山陰兩道九箇國の領主毛



廣 島 城 址

利右馬頭輝元の築く所である、天正十七年四月輝元より二宮太郎右衛門尉就辰に築城總奉行を命じて董役せしめ同月十五日「鋤初の式」を行ひ天正十九年四月牙城先づ成り輝元高田郡吉田より宗族重臣を隨へて城に入り慶長四年正月十四日竣功の賀儀を行つたのである。

現在に於て舊態を存するものは天主閣と城廓の一部のみとなつて居る、天主閣は五層にして東西二十二米南北十六米、高さ三十三米巍然として冲天に聳えて居る。

尙歴代の城主を擧げれば次の如くである。

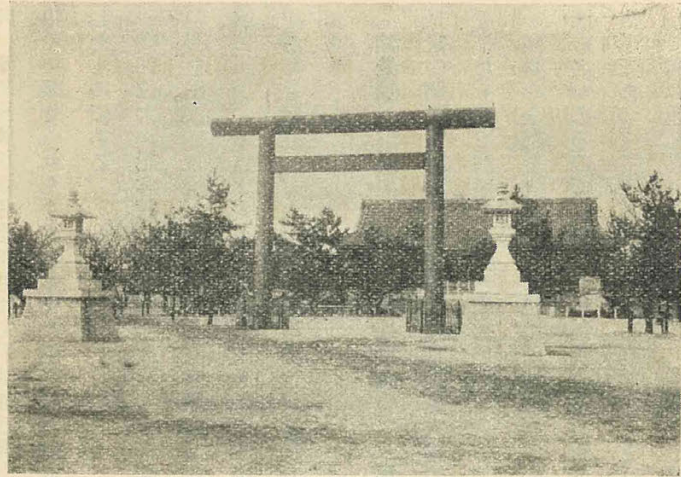
| | | |
|---------|----------|--|
| 毛 利 輝 元 | (七箇月間在城) | 〔天正十九年四月入城 慶長五年十月長防二州に削封、長州萩に移る〕 |
| 福 島 正 則 | (十八年同) | 〔慶長五年十月尾州清洲より移封、同六年三月入城 元和五年六月繼封、同年七月信洲高井野邑に移る〕 |
| 淺 野 長 晟 | (三十三年同) | 〔元和五年七月紀州より移封、同年八月入城 寛永九年九月三日逝去〕 |
| 同 光 晟 | (七箇月間同) | 〔寛永九年十月襲封 寛文十二年四月十八日致仕〕 |
| 同 綱 晟 | (十箇月間同) | 〔延寶元年正月二日逝去〕 |
| 同 綱 長 | (三十五年同) | 〔延寶元年二月襲封 寶永五年二月十一月逝去〕 |
| 同 吉 長 | (四十二年同) | 〔寶永五年三月襲封 寶曆二年正月十三日逝去〕 |

| | | |
|------|----------|--|
| 淺野宗恒 | (十一箇年間同) | 〔寶曆十二年三月襲封 寶曆十三年二月二十一日致仕〕 |
| 重晟 | (三十六年間同) | 〔寶曆十三年二月襲封 寛政十一年八月二十一日致仕〕 |
| 齊賢 | (三十一年間同) | 〔寛政十一年八月襲封 天保元年十一月二十一日逝去〕 |
| 齊肅 | (二十七年間同) | 〔天保二年正月襲封 安政五年四月十二日致仕〕 |
| 慶熾 | (六箇年間同) | 〔安政五年四月襲封 同 年九月十日逝去〕 |
| 長訓 | (三十箇年間同) | 〔安政五年十一月襲封 明治二年正月二十四日致仕〕 |
| 長勳 | (二七箇年間同) | 〔明治二年六月版籍奉還、廣島藩知事に任ぜられ、 明治四年七月十四日廢藩置縣に至る〕 |

比治山舊御便殿

明治二十七年日清戦役の際九月十五日明治大帝大葬を本市に進め給ひ、十月十五日臨時第七回帝國議會を廣島に召集し、西練兵場に假議事堂を建設せられ十月十八日車駕親臨して開院の式を擧げさせ給ひし時御便殿に充てさせられし御建物である。

翌年平和克復の後、本市は永久記念の爲之が拂下げを請ひ、同四十二年十月地を此處に卜して奉遷したものである、御建物は桁行二十米四五、梁行九米〇九であつて本市は之に桁行三十二米七二、梁行十二米七二用材梅白木の上覆建物を造營し奉安したのである、殿前の大華表は、明治大帝御大葬の



殿 便 御 舊



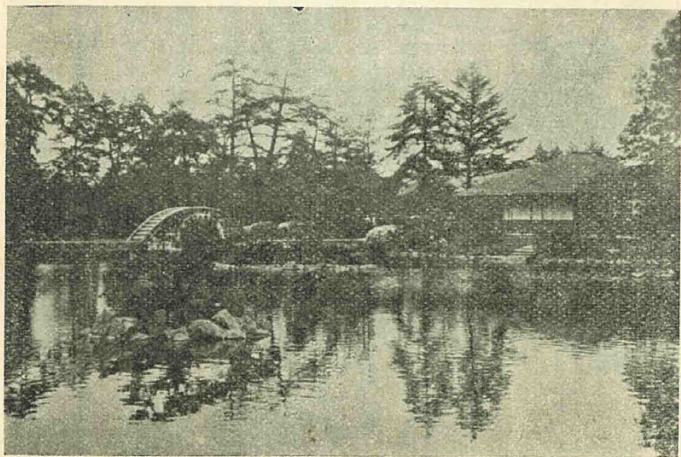
館 念 記 典 大 位 即 御

時、東京市青山齋場殿に建てられ大正二年二月東京市に下賜せられたものを本市に譲受けて此處に建立したものである。

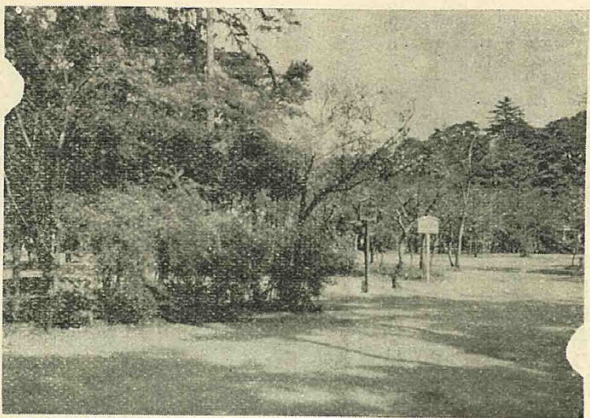
御即位大典記念館 大正四年大正天皇御即位大典の禮を擧げさせ給ふや、本市は國家最高の典儀を永遠に記念する爲、大正七年比治山公園に繪馬堂式大記念館を建立し、大祭祝日等の際市民の遙拜所として居る。

縮景園 市内上流川町の北端に在つて、舊藩主淺野家の別邸である、元和五年淺野長晟入國の翌年造成したもので別稱を泉邸と謂ふ。

園景の全部を支那西湖に模したりと謂ふので縮景園の名があるのである、面積三萬九千六百六十九平方メートルであつて、奇石珍木配置の巧妙なこと、五歩にして其の趣を異にし、十歩にして其の景を移し、閑



縮景園



鏡津公園

雅幽邃なること宛然仙郷に遊ぶの感がある。

園内の大書院を清風館と言ふ。

明治二十七年車駕行幸あらせ給ひてより屢々高貴の方を御迎へ申した所である。

尙園の西南隅に観古館あり淺野家の家寶を陳列して一般の觀覽に供して居る。

里程は廣島驛より九百八十二米あり。

明治天皇御飲料の井泉 縮景園内にあり、明治二十七年八年戰役の際、駐輦八箇月の間日常供御の清水を此の井泉より採らせられたものである。

鏡津神社 市内二葉の里二葉山麓に在り、天保六年安

藝守淺野齋肅祖先追孝の意を以て造營せられしものにして、太祖淺野長政夫妻及幸長、長晟公を祀る、境内敷地

二萬一千八百八十八平方メートルあり、結構宏壯にして西に神田川の清流を控へ背後に綠樹鬱蒼たる二葉山を負ひ頗る雅致に富む明治五年二月社格を縣社に列せられて居る。

里程は廣島驛より約千三百米である。

二葉の里 大須賀町の西北隅に在り現在は町名を二葉の里と稱ふ。

其の大半は饒津神社の境内にして、北は二葉山を負ひ、西南は神田川の清流を控へ、古松老杉鬱茂して枝を交へ、梅櫻楓樹亦其の間を點綴して幽閑の風趣に富んで居る。

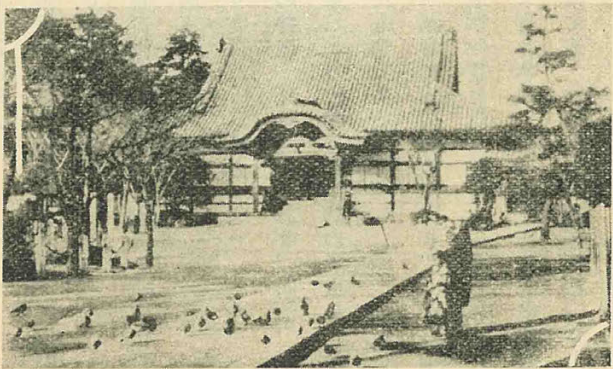
明治七年九月公園地となつたが、同三十一年八月本市が比治山、江波の兩公園を新設するに及んで縣は公園を廢して饒津神社の境内地としたのである、而して四季の遊客常に絶えず艶陽四月の候には遊覽の士女殊に多く、又初秋萩殊に名があり日夜遊客の絶える間のない状態である。

尙此の外に太宰原天満宮及明星院、鶴羽根神社等がある。

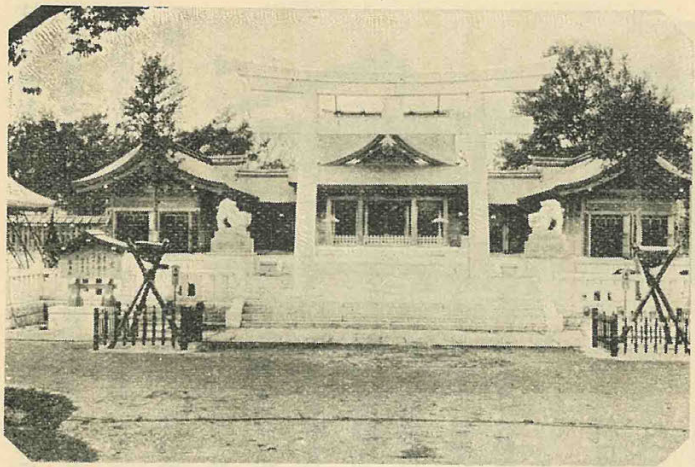
里程は廣島驛より約千三百米である。

宇品島 現在に於ては元宇品町となつて居るが、舊時は安

藝郡仁保島村に屬し、宇品築港の後、明治三十七年十月本市に編入したものである、全島老樹繁茂鬱



國 泰 寺



廣 島 招 魂 社

蒼し稀有の古代原始林である、島脊に觀音院があり眺望絶佳である。

國泰寺 市内小町に在り、宗派は曹洞宗にして僧惠瓊の開基に係り文祿年間朝鮮木を以て建立せりと謂ふ、後三度の祝融に遇ひ舊態は存ぜざるも尙結構壯大なるものがある。

境内に豐國神社並豊公遺髪之塔及淺野公數代之墓標、赤穂義士大石良雄の室石東氏及大石大三郎の各墓石が在る。

寺内に天然記念物として指定されたる樟三樹あり里程は廣島驛より約二千七百五十米あり。

官祭廣島招魂社 は現在西練兵場西南に在り。

神靈は明治維新より明治十年戊申の役に至る迄の皇國の爲献身したる七十八柱の英靈及明治十年以後幾多の戦役事變に際し護國の精魂と化したる三千餘

柱の英靈を合祀して居る、社殿の結構近郊に其の比なく神苑は太田川の清流に臨み老松灌木を以て蔽ひ神嚴なる小公園化せしめんとして居る。

里程は廣島驛より約二千三百米である。

賴山陽の舊居 市内袋町に在り、一世を指導し維新回

天の大業の源を成したる「日本外史」を著述せられた居室等當時のまゝを保存して居る。

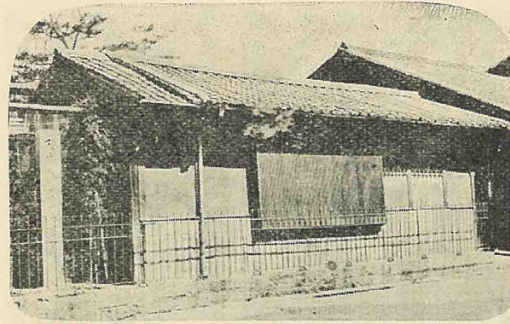
里程は廣島驛より

約二千七百三十米である。

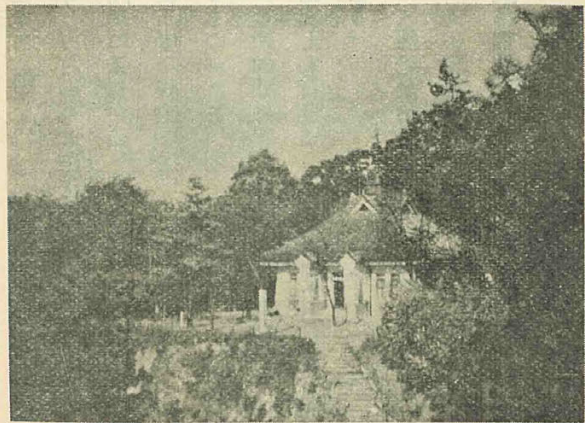
賴山陽文德殿 比

治山公園の山腹に在

り、賴山陽先生百年祭を記念する爲に廣島市單獨の事業として計



賴山陽舊居



山陽文德殿

畫し山陽文德殿建設翼賛會の努力により完成、昭和九年十月十五日の竣功である、殿内には縣下出身の青年彫刻家、富樫政人氏の丹精に成る先生の聖像が安置されてある。

賴家諸先生の墓 賴山陽の父春水を初め賴家一族諸先生の永眠の地である毎年一回有志によりて祭典が行はれる。

觀喜松 山陽文德殿の境内に在り、樹齡

千年の老松、此の地は元安養院觀喜寺の在りし地である、取り残されたる老木に昔の名残りを止めて名刹の遺跡を物語つて居る

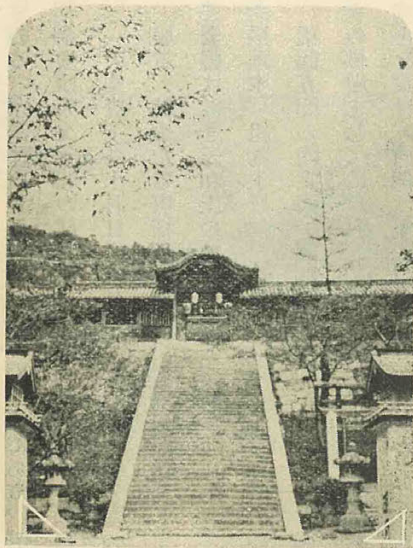
東照宮 市内尾長山の中腹に在り、天保

年中藩主淺野光晟の創建に係り、徳川家康の靈を祀るところである、境域五千三百平方米あつて社殿は南面し石階五十一段ある

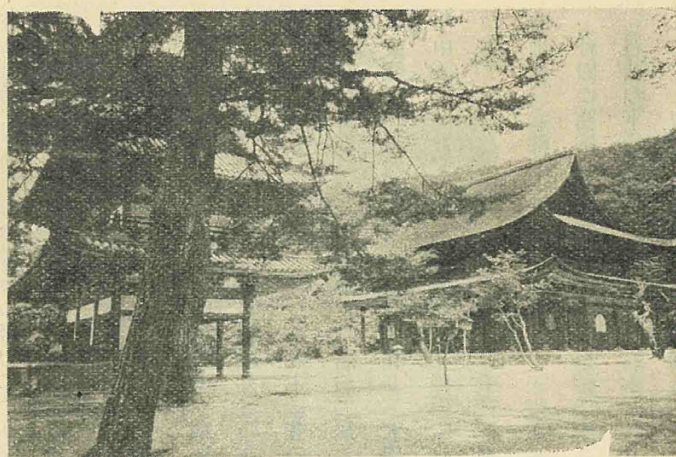
社殿の結構壯麗を極め往時は祭禮儀頗る盛大であつたと謂ふ。

石階の下參道の兩側に櫻花の竝木があり陽春の候には賞遊を試る者絶間が無い。

里程は廣島驛より約千九百米である。



東照宮



不動院

不動院 市内牛田町太田川左岸に在つて、足利尊氏が諸國に建てた安國寺の一にして、僧惠瓊が殿堂、方丈、書院、厨庫等を建てて之を再興したものである。宗派は古義眞言宗仁和寺の末寺であり、其の金堂は天文年間の建立にして、天井畫龍の落款に、「天文庚子冬十月日僧永怡筆」とあり國寶となつて居る、純乎たる唐様禪宗建築重層入母屋造にして、全體は低き三和土の壇上に立ち、軒は上下共に二重扇垂木、組物上層は三手先の詰組、下層は三斗組、梁間五間の内正面一間開放となつて居ることは禪宗の佛殿としては珍らしく、四面には棧唐土と華燈窓とを設け、内部は土間、中央に須彌壇がある、天井は中央鏡天井にして、永怡の天人、龍の畫がある。其の他は總て化粧屋根裏を露出し、其の自由な構造に大に見るべきものがある。内部の柱、虹梁肘木、

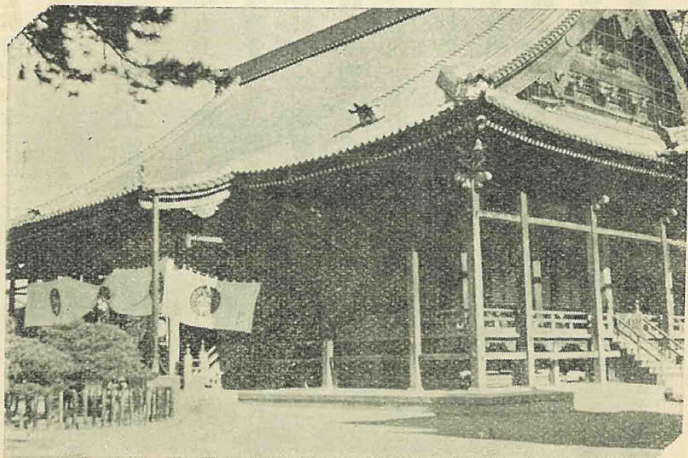
太瓶束等總て極彩色を用ひ、此の建物には後世の補修多分に加はつて居るけれど、確に室町時代禪宗建築の傑作の一に數えられる。

本尊藥師如來坐像は國寶であつて藤原時代典型的の作品である、梵鐘は(銅製)一には形式上は普通の朝鮮鐵にして何れも國寶に指定せられて居る。

太田川の歸帆を眺め春は櫻、夏は瀧、秋は茸狩、紅葉狩一日の行樂地として賽客跡を絶たざるの風景である。

里程は廣島驛より約三千米。
本派本願寺廣島別院 市内寺町に在り、元は龍原山佛護寺と稱して居たが明治四十一年四月本派本願寺廣島別院と改めたものである。

その本堂は文久二年再建のものにして桁行二十間餘、梁行十八間餘であつて市内寺院中第一のもので



本派本願寺廣島別院

あつて、眞宗安藝門徒の大本山として約八萬の善男善女が讃仰の本として居る。

十三、官公衙其他

廣島縣廳 明治十一年建築したるもので市内水主町に在り
構内廣く縣會議事堂、武德殿及縣立廣島病院等相隣接し名園
與樂園は其の裏にあつて春季に最も佳し。

里程は廣島驛より約三千二百七十米あり。

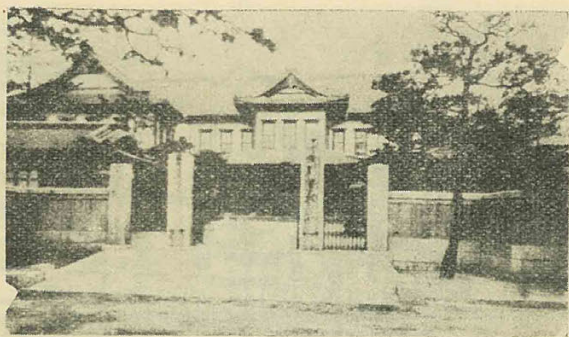
廣島控訴院 市内小町に在り、明治十九年五月設置せられ
たもので其の管轄區域は岡山、山口、廣島、鳥取、島根、愛
媛の六縣であり管内に地方裁判所六、區裁判所三十九ある。

里程は廣島驛より約二千七百三十米あり。

廣島地方裁判所 市内三川町に在る、明治十四年の建築に
して其の管轄區域は廣島縣一圓にして、吳、尾道に各支部が
ある。



廣島縣廳



廣島控訴院

里程は廣島驛より約二千三百米あり。

廣島區裁判所 廣島

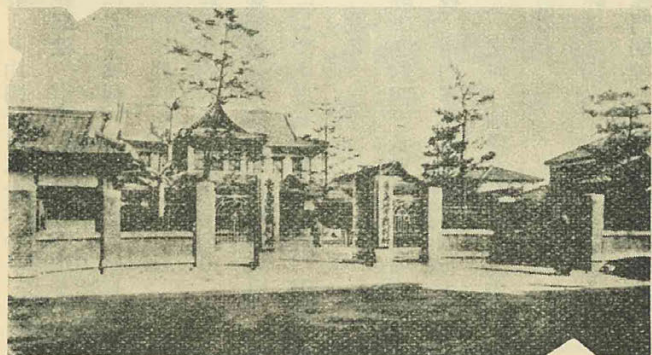
地方裁判所構内に在り、其の管轄區域は廣島市及佐伯、安佐、山縣、安藝各郡の本市に接せる一部を直轄して居る。

廣島刑務所 市内吉

島町に在り。

廣島文理科大學 市

内東千田町に在り、昭和四年四月の開校にし



廣島地方裁判所同區裁判所

て、文科、理科に分れて居る。
尙附屬圖書館及南隣して博物館がある。



第五師團司令部

里程は廣島驛より約四千六百六十米あり。

廣島高等師範學校 市内東千田町に在り、明治三

十五年の開校にして文科、理科、教育科に分れ構内に附屬中學校、同小學校を併置して居る。

里程は廣島驛より約四千四百四十米ある。

廣島高等工業學校 市内南千田町に在り、大正九

年一月の開校にして、電気、應用化學、機械、醸造の四科に分れて居る。

里程は廣島驛より約四千八百米である。

廣島高等學校 市内鞆町に在り、大正十三年十二

月の開校にして、文科、理科に分れ、其の規模最も大なるものがある。

里程は廣島驛より約二千八百八十米である。

廣島縣女子專門學校 市内宇品町に在り、昭和十

年四月開設せられたるものである。

第五師團司令部 舊廣島城廓本丸址下に在り。

里程は廣島驛より約二千五百米あり。

歩兵第九旅團司令部 市内基町西練兵場東北側に在り。

里程は廣島驛より約二千米あり。

陸軍運輸部 市内宇品町に在り。

廣島聯隊區司令部 市内基町西練兵場東北側に在り。

廣島借行社 市内基町に在り。

廣島憲兵隊及同憲兵分隊 市内基町に在り。

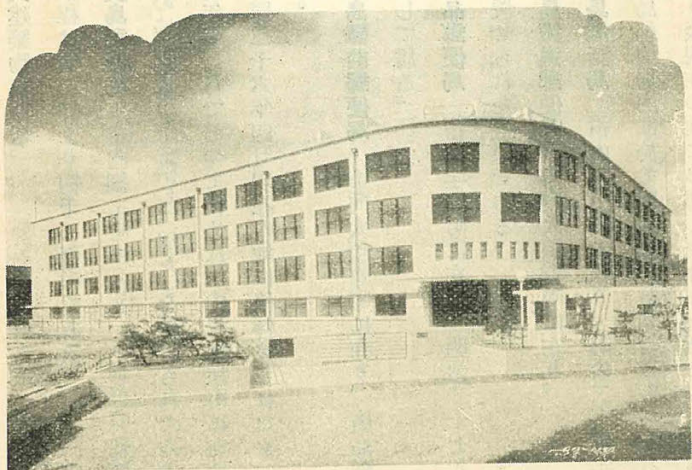
廣島陸軍兵器支廠 市内宇品町に在り。

廣島陸軍被服支廠 市内出汐町に在り。

宇品陸軍糧秣支廠 市内宇品町に在り。

廣島遞信局 市内基町に在り、昭和七年三月起工

同八年四月竣功し總經費四十四萬圓で白色四階建近



廣島遞信局



廣島鐵道局假廳舎

代式建築物である。

里程は廣島驛より約千二百米である。

廣島郵便局 市内細工町に在り、本市に郵便局（初めは郵便役所と稱して居た）を設けられたのは明治四年十二月であつて初めは市内平田屋町に在つたのを同二十六年四月現在の地に移轉せられたものである。

廣島驛前郵便局 市内大須賀町に在り、廣島驛に隣接して居る。

宇品郵便局 市内宇品町に在り、明治二十七年八月設置せられたものである。

廣島鐵道郵便局 市内大須賀町に在り。

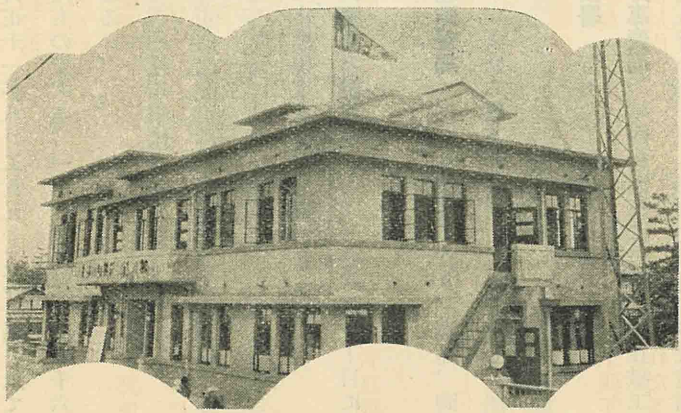
廣島電話局 市内下中町に在り、明治三十四年二月廣島郵便局内に於て電話交換を開始せられたるに始まり後現在の地に移轉し廳舎も新築せられ名稱も

亦廣島電話局と改められたのである。

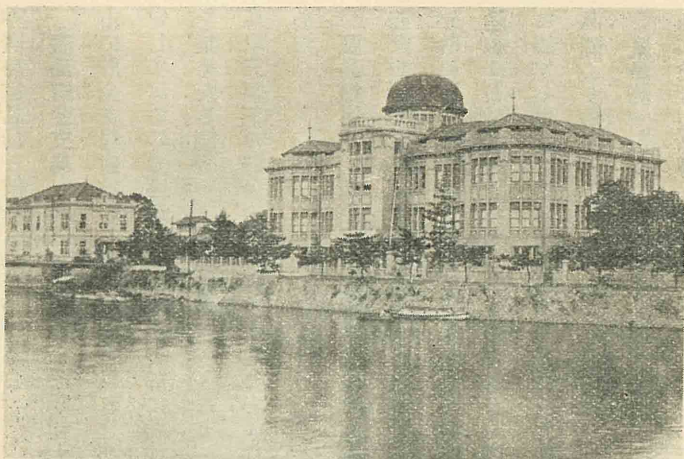
廣島貯金支局 逓信當局に於ては昭和十年度に於て本市に貯金支局建設のことを決定せられ之が建設敷地も内定して居るので遠からず市内中央部に近代建築様式の粹を集めたる廳舎の實現を見ることとなり、廣島、岡山、鳥取三縣下の貯金事務を管轄することとなつて居るのである。

廣島鐵道局 鐵道局本廳舎の建設せられる迄假廳舎を新築設置せられ昭和十年八月より開局せられて居る、之が管轄區域は東は山陽本線明石驛より西は下關驛迄、山陰線は石見益田以南西、四國の全線及關門及宇高連絡船に屬する區域である、假廳舎は市内宇品町に在り省線宇品驛より約四百米の地點である。

廣島驛 市内大須賀町に在り、明治二十七年山陽鐵道株式會社廣島驛として設立せられたものであるが、現在



廣島放送局



廣島縣產業獎勵館及廣島工商會所

の廳舎は大正十一年八月工費五十二萬餘圓を以て建築せられたものである、一日の乗降客一萬五千六百八十人である。

横川驛 市内横川町に在り。

已斐驛 市内已斐町に在り、本市西玄關口として重きを成して居る。

隣接して宮島線電車西廣島驛が在る。

省營バス廣島自動車所 市内三篠本町一丁目に在り。

廣島稅務監督局 市内八丁堀に在り、廣島、岡山、鳥取、山口、愛媛六縣下の稅務行政を管轄して居るのである。

廣島稅務署 市内八丁堀に在り。

廣島地方專賣局 市内皆實町に在り、現在職工數千三百十九人で一箇年間（昭和九年度）の製造高は

刻煙草百九十八萬九千五百四疋、兩切煙草二十五億七百十萬四千三百八十本にして此の價額六百十四萬八千九百八十圓となつて居る。

神戸稅關廣島出張所 市内宇品町に在り。

廣島米穀倉庫 市内大洲町に建設せられるべく敷地は決定して居るので遠からず廳舎の建築を觀ることとなつて居る。

廣島營林署 市内八丁堀に在り。

廣島縣工業、同醸造試驗場 市内東白島町に在り。

廣島水産試驗場草津支場 市内草津南町に在り。

廣島商工會議所 市内猿樂町元安川畔に在り。

廣島縣產業獎勵館 市内猿樂町元安川畔に在り、本市商工業の指導及商品陳列裝飾等の展示並斡旋等に盡瘁して居る、一箇年間（昭和九年度）の開館日數三百五十九日、展示及即賣出品點數一萬九千五百十四點、之が縦覽人員十九萬五千五百四人、一日平均五百四十三人が入場して居る。

廣島縣病院 市内水主町に在り。

日本赤十字社廣島支部病院 市内千田町二丁目に在り。

廣島中央放送局 市内上流川町に在り。

市立各廢一覽

| | |
|------------|-------------------|
| 宇品出張所 | 廣島市宇品町一、三〇二ノ二に在り |
| 公會堂 | 同 國泰寺町二〇三に在り |
| 船入病院 | 同 舟入幸町六五〇に在り |
| 衛生試驗所 | 同 舟入幸町六五〇船入病院内に在り |
| 畑賀病院 | 安藝郡畑賀村に在り |
| 屠場 | 廣島市福島町に在り |
| 常設家畜市場 | 同 福島町に在り |
| 東松原公設市場 | 同 大須賀町一、〇四八ノ三に在り |
| 荒神町公設市場 | 同 荒神町二に在り |
| 段原町公設市場 | 同 段原大畑町一〇九ノ九に在り |
| 大手町九丁目公設市場 | 同 大手町九丁目二三二に在り |
| 天神町公設市場 | 同 天神町官有に在り |
| 河原町公設市場 | 同 河原町一二にあり |
| 東診療所 | 同 荒神町二六六に在り |

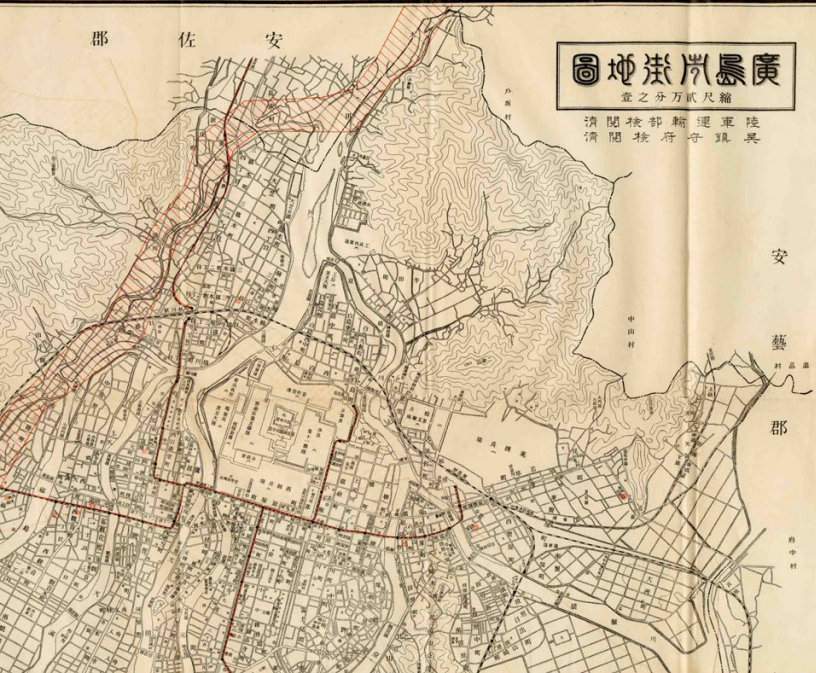
| | |
|---------|----------------------|
| 西診療所 | 同 西觀音町一丁目一六、二〇三ノ一に在り |
| 中央職業紹介所 | 同 千田町三丁目に在り |
| 勞働紹介所 | 同 千田町三丁目に在り |
| 東隣保館 | 同 尾長町四〇三ノ五に在り |
| 西隣保館 | 同 福島町四〇〇ノ一に在り |
| 草津託兒所 | 同 草津東町三九四ノ四に在り |
| 仁保託兒所 | 同 仁保町一〇八ノ三に在り |
| 廣瀬託兒所 | 同 廣瀬町二〇二ノ二に在り |
| 江波託兒所 | 同 江波町五三二ノ一六に在り |
| 三篠託兒所 | 同 楠木町二丁目三二三に在り |
| 楠那託兒所 | 同 仁保町六一八に在り |
| 東公益質屋 | 同 稻荷町八二ノ一六に在り |
| 西公益質屋 | 同 天満町一九二ノ一に在り |
| 水道部基町分室 | 同 基町二に在り |
| 水源 | 同 牛田町一、八九六ノ三に在り |

安 佐 郡

廣島縣地形圖

縮尺貳萬分之壹

陸軍運輸部檢閱
吳鎮守府檢閱



安

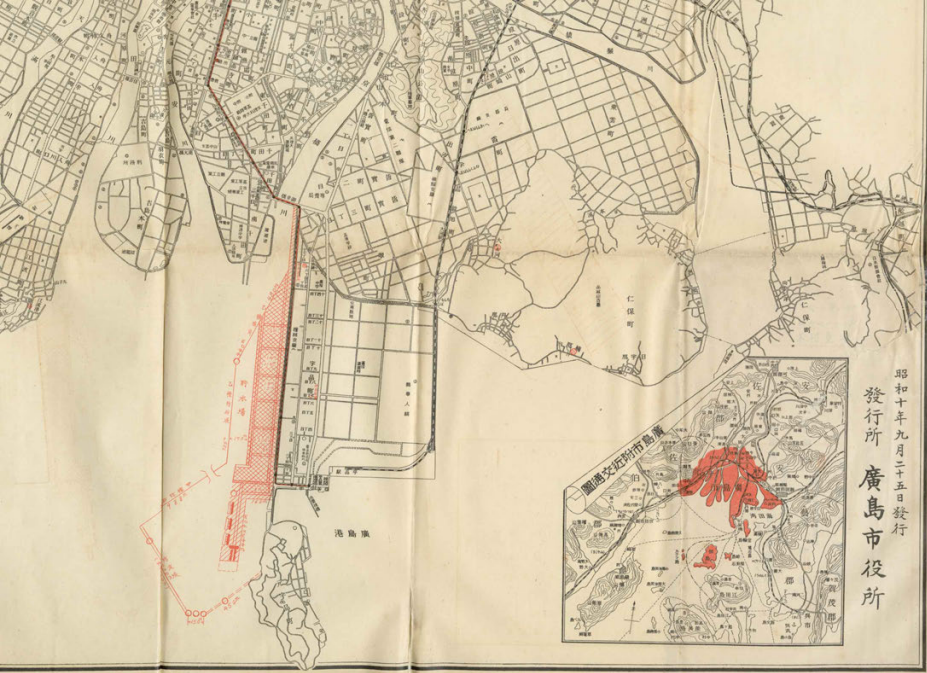
藝

郡

前中村

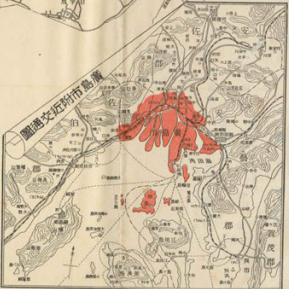
中山村

戸原村



昭和十年九月二十五日發行

發行所 廣島市役所



安佐郡

安佐郡



佐

石内村

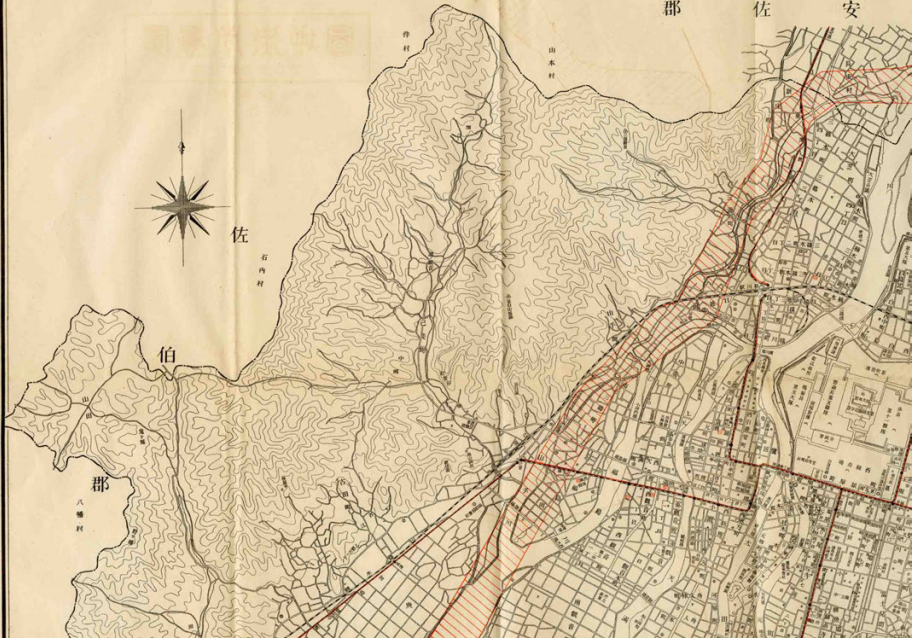
伯

郡

八幡村

丹波村

山本村



広島市公文書館
 平成 4 年 8 月 20 日
 寄贈者
 4501-19
 [Redacted]

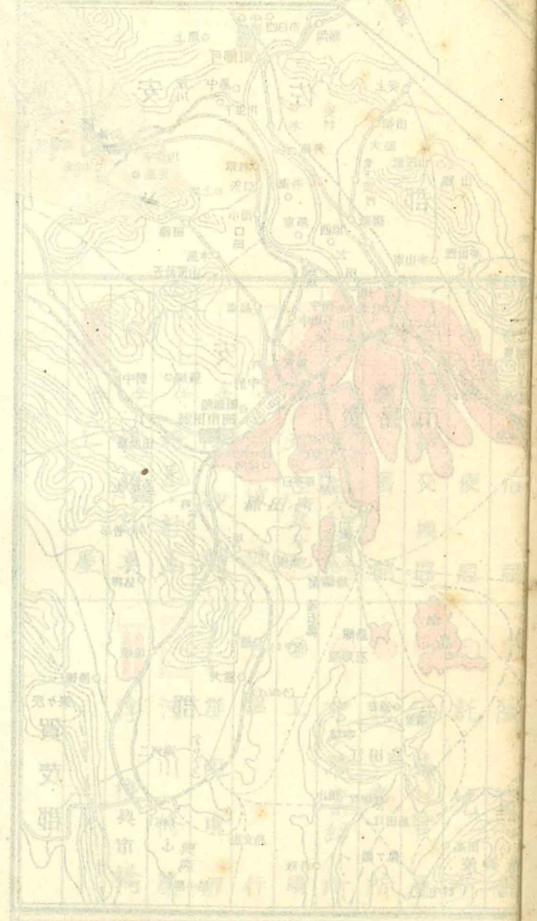
318,10

昭和十年九月二十日印刷
 昭和十年九月廿五日發行

廣 島 市 役 所

印刷人 廣島市大手町七丁目壹番地
 增 田 計 雄

印刷所 廣島市大手町七丁目壹番地
 株式會社 增田兄弟活版所
 電話三三三・五八三番



廣島市役所
 昭和十年九月二十日發行

印刷所 株式會社 增田兄弟活版所

